

アラン
大戦の思い出
(下)



高村昌憲 訳

第十一章

一九一六年一月に、我が軍はボーモンから近い場所を取戻しましたが、一方には我々の砲兵中隊がおり、もう一方の相手はフリレイにおりました。そして起伏の多い土地は静かでした。しかし、司令官は砲撃が届かない大変に大きな村のミノルヴィルに残っていました。雌牛とミルクと実際の馬小屋もあり、殆どにベッドもあります。電話線に沿って行く競争も幾らかありました。私にも一部屋あり、ベッドのスプリング台上にはマットレスが二つありました。つまり私には素晴らしい驚嘆の時間でした。私と良く知り合いになった中尉は、それ以上恐ろしくなくなりましたし、彼はマットレスに引き付けられていました。彼は私に言いました、「私はマットレスを一つあなたに与えますが、一番良いものを取って良いのですよ」。そして選ぶことになります。しかし私は彼に言いました、「それでは二つとも運んで下さい。スプリング台はますます上等です。私はマットレス一つでは最早眠れませんから」。実際に彼はマットレスを二つ持って行かせました。私はマットレスを意に介しませんでしたが、それでも私は彼に少し気詰まりを感じました。彼は私よりも十五歳以上若かったのです。私が死者にうんざりした日があったり、あるいは良く言われる様に私が眠っていた干し草のベッドで、身動き出来ないまでに丸太棒の様に固くなって眠った日があったのもこの村です。これは一連の特別な訓練でした。私は飛行士の長靴に驚きました。そして私は思い切って腿まで泥の中に這入ってみましたが、足を引き抜く努力を一日中行った時がありましたので、筋肉をそれ程鍛えて置くこともなかったのです。その点については、偶然に私は十キロメートル程進まなければならない時もありました。しかしそれは、私のことは何も気にせずにテーブルの傍に私を三時間も立たせて置いて、自分は座っていた植民地軍の将校の処へ行くためでした。その代わりに、その後で私は植民地軍の台所で美味しい夕食を味わいましたが、更に私が教えたことで手に入れたチーズと極上のブランデーもありました。それらはコックたちを感激させました。彼らのうちの一人が「これからもそれらは手に入るだろうね」と言ったので、私は「それではそれらが手に入った時には何を作ってくれるのかね」と尋ねました。一九三一年八月の今日にそれらの日誌を読んだ後でも、私はこの質問をした時の感覚を忘れないでいます。物質に対して精神が勝利した後に、私は干し草の上へ行きました。それから大きな疲労を感じました。翌日の夜、私は足を引き摺りながらやっとの思いで前進しましたので、到着したばかりのJ中尉はもう私に目を付けていました。私は彼を憎み、宿営地を憎みました。そしてそのことは当然のこととして、より一層戦争の近くに私を送り込みました。数日後に、私は師団へ電話機を取りに行かなければなりませんでした。もう一人の中尉は連隊長を補佐していて大変に親切で、私が満足しているかどうか知りたがっていました。私は宿営地での生活に関して少し話をした後で言いました、「それを見るために戦場へ来たものではありません」。彼は単に言いました、「他のことも見る事が出来ますよ」。その日に例の司令官は、大きな力を持って沢山の仕事を持つフリレイの部署へ私が行くのが好きかどうか尋ねました。彼はお世辞も幾らかつけ加えて言ったのです。私は好きなものは何も無いし、何も選択しないことに決めていて、命令を実行するだけであると答えました。数日前に彼は、下士官の階級と、軍隊の中樞で

あるタルジュ連隊長側近の秘書の地位と、どちらか一方を私に提案していました。私はそこできっぱりと断りました。事務局へ行って私は何をするのでしょうか。私はそこでは何の役にも立ちません。でも、今度は拒みませんでした。彼は私を任命しました。かくして運命は、手を伸ばしてから引っ込めます。如何に選択したくなくても、何時かは選択しなければならないのです。

一種の小麦用の袋であった私の砲兵の袋を新しい部署へ移動する前に、私は命令が示している二つの話をその儘に語りたと思います。必要性和緊急性がより一層良く感じる様に、殆どが兵舎の生活である宿営地の生活はそこでも大変良く理解されました。当時は我々の短筒の小銃が取り替えられました。機関銃手たちには最も良く使用されていた同じ口径の武器でした。アメリカのものと言われていて、銃尾は全く異なっていました。分解して、きれいにして、再び組み立てなければなりません。そして最初は、見様見真似でその順番を見付けなければなりません。問題は機械全体に戻ります。急いでやらなければなりません。というのも私たちは翌日に、色々な武器の点検が告げられていたからです。私はこの種の仕事が気に入っています。私の仲間たちも、それには巧みでした。要するに私たちは屋根裏部屋で、きれいなハンケチの上にグリースの跡も無く輝いている部品を順番に広げて良いのです。何故なら、その様なことをするには決まりがあるからです。ところが屋根裏部屋の埃の中で、その決まりを適用するのが困難であることは分かりません。再役軍人と同じ位に自信があった私は、恐ろしい将校が来るのを待ちました。しかし、見終わってあちこちでがみがみ言っていた将校が、私たちを梯子から見て、つまり高い処から見ていて、微笑して去って行きました。権力の規則の一つはその点では甚だしい自惚れに似ていて、期待されている様なことしか決して行うものではないことを私は見抜いた様に思いました。私はもう一つの状況においてもその証拠を手にししましたが、それは酷く恐れられていたG大尉が、大変良く整えられていた馬具の装着を点検しに立ち寄った時に、締め金や留め針の処に革の小さな傷を見付けては楽しんでいたのです。そして、三回までも全てやり直しさせたのです。それは涙が出る程でした。しかし部下たちは勇気と手腕を集中して、四回目には全てが新品の様になりました。自尊心と希望は一種の愛と無縁ではありません。しかしその大尉からはやって来ませんが、それが善であったと言わせているのでした。彼には他にやるべきことが何も無かったのです。私たちはそのことを知りました。貶された完璧な作品を部下たちが馬小屋で再び装着している間、彼は何もしないで居残っていたのです。勿論、スタンダードが言っている様に、彼は支配していたのです。

フリレイという地点は棘でしたし燃えていました。ヴェルダンへの攻撃の気晴らしを求めていたこの時期は、なお一層そうになりました。しかし私が軍人精神を持たない兵士でありたいと願うことが出来たのも、全てそこで見出したのです。連隊長を補佐する中尉がわざわざやって来て言った様に、私は自分の家具の中で迅速に落ち着いて如何なる人々にも何も言わずに、仕事を観察するための数日を自分に与えました。私は、傾いた岩で非常に上手く守られていた、タールを塗った厚紙で出来た事務室にいました。そこには三十二本の電話線が付いた電話装置があり、師団の砲兵隊と当戦区の歩兵隊との中間にありました。各砲兵隊には電話線があり、歩兵隊にもあり、師団にもありました。二人の話者には仕事に正確なものを全て提供しました。ベルの音が鳴る度に降りる小さなシャッターは、電話がかかっていることを示していました。差し込みが、

多様なあらゆる結合を可能にしていました。それは私にとっては新鮮なことでした。しかし、少なくとも私は一人前の耳を持っていて、もしも言って良いなら、電話から戦争の現状や見通しを知りました。見抜くこととは、その時は半分が聞くことです。一週間後に、私は通常の時間で立派に電話交換の役割を果たすことが出来ました。そして二週間後には、最も敏捷な者にも匹敵しました。しかしながら一週間後の時は、余りに気難しい性格の或る化学者が重要な時でも庇の無い帽子を司教の縁無し帽子の様に裏返しに被っていたのですが、私はその時彼を超えることが出来ませんでした。動揺の最初の兆しが直ぐに来るその仕事は、同時に鳴った呼び出し音でも五回か六回で応答することになり、階級や緊急性に従って上訴人たちを両方とも電話につなげることにあり、彼らの話が終わるや否や差し込みを入れ直すことにあり、沈黙して忍耐していた相手につなげることにあり、そして同様に電話中であった連隊長には迷惑を掛けること無く全ての人に可能な限り応答することにあります。しかし、踵に砲弾の衝撃があった時にも、迂回した小さな道を通って私たちは素早く避難所に到着しました。ここには速さの外には他に困難はありませんでした。そして実際にその仕事には、どんな躊躇した動作も無駄な言葉も排除されていました。例えば歩兵隊が障害物を尋ねた時、それは屢々演習の様に行われましたが、時々は危機の時もありました。私は呼び出し音と、私たちの頭上で唸りを上げていた砲弾の通過までの間を、三十秒以上の時間を置かない様にしていました。これは素晴らしい仕事であったと私は言えます。しかし私には先ず混乱した数々のことがあったのです。幾つもの班が順番に様々な砲兵中隊からやって来ました。将校補佐は屢々変わりました。そして連隊長は役に立ちませんでした。連隊長は一瞥して私を良き召使いの人間と認めましたが、彼は間違っていないでして。そして直ぐに彼は、私が彼だけにしか従属しないやり方で沢山の権限を私に与えました。「班の構成、任務、休息に対してあなたはやりたい様にやってくれ。そして私を問題で困らせないでくれ」。その様に実際に行われました。私は電話交換手を選択しました。嫌がっていたりぐずぐずしていた者はどんな者でも除いて電線の修理兵たちを選びました。私の小隊は手腕があつて良い雰囲気です。夜でも昼でも事態が悪化した時、そして唯一の技手が三人の人手と二人の頭脳を欲しがり始めると、どんな活動にも乱れることがありませんでした。巡回の中に入っていた一番元気そうな者が、二段ベッドから出て来るのが見られました。決して命令が与えられたものではありません。私は掲示用の板とか、記憶の手助けになる略図を置くことに専念しましたが、それは彼らに意見を求めることであり、まさに自惚れさせてはならないためでもありました。その様な障害に対しての砲兵隊の変化は準備すべきことでした。その様に正確な時刻に他の者と交替させたのは掲示用の板でした。しかし更に十分前には、新しい砲兵中隊においても全員が生き生きしていたことが確信されていなければなりません。そして時々何も理解していなかった新しい電話交換手が激しく非難されました。そこから将校へ電話が行きました。そこで私は何時も、些細なことには全て完全に無関心であることを美德としていた連隊長の名において、話をしながら頓着せずにその場を収めました。本当に彼はまさにそれらのことを知りたくなかったのです。そして、私たちの見事な演技は演技でなくなりました。戦線が熱を帯びて来たのです。急襲と夜間砲撃と突然の弾幕が何時も不意にあり、我々は全員待機しなければなりません。私は或る日、地面の震動によって腰掛から立ち上がったことを思い出します。十五発の地雷が破裂し

たことを私は次々に理解しました。一番急いでやることは、全ての砲兵中隊へ警報することでした。一分後には弾幕がひゅるひゅると通り過ぎました。その効果は完璧でした。敵は一メートルも前進しませんでした。でも丁度その時は、私は何も知りませんでした。歩兵隊の連隊長が走りながら到着しました、「全ての弾幕を攻撃させなければならぬだろう」。私は彼に大空を示しました、「弾幕は通過しています」。これらのやり方は半分程しか喜びはありませんでしたが、私にとっての連隊長は私を城壁として役立たせたのです。

彼は何時も来ませんでしたし、直ぐに司令官たちが取り替えられました。司令官たちが止まっていたのは六日間でした。その様にして私は、前の司令官とその補佐役のJ中尉に再会しました。慣れる癖がつけられていました。私は慣れて強気になりました。連隊長という名だけが彼らを敗走させました。そして全てのことが大変上手く行きました。しかしながら私はそれらのあり方を忘れてはならなかったのですが、時々忘れました。或る日、見知らぬ中尉が弾幕の遅れについて私に質問がありましたが、それは時計に誤りがあったためと言われていた遅れでした。後になって分かったので、私は自分自身で不満な様子を話すつもりで言いました、「私はびっくりした」。この言葉は私の地位を超えていました。彼は威厳を持って毅然と私に言いました、「びっくりしたのは私だ」。私はルイ十四世のことを理解しました。しかし、サン＝シモン⁽¹⁾が語る青い服の下僕に似て、これらのあり方を守る状況にあった私は、やりたい様にやりました。しかしながら或る日、連隊長自身が国主の視線を私に注ぎました。ノンザールへの七五ミリ砲の一斉砲撃が要求されました。ノンザールは射程範囲外であることを私は知っていました。僅かな言葉で答えてから私は、先ずこの要求のことを連隊長へ報告に行きました。彼は物差しを持って地図を調べていました。彼には知識が無いのです。それから彼は私に答える様にと言いました。何でも答える様にと言っていました。「それは本当です」と私が言っても間違いがありました。私たちの協定が破られたのを私は理解しました。ところが、当時の連隊長の避難所は少し打ち壊されて、運転手も負傷しました。彼は最早戻って来ませんでした。司令官たちは、複雑なやっかいな仕事には足場を置きませんでした。彼らの六日間には、仕事を学ぶための時間はありませんでした。私たちは騒音の中での睡眠にはすっかり消耗しました。私たちのベッドが夜中揺れていたのは本当です。しかし私たちは眠ることを学びましたし、それは私が消耗しなかった一つの技術でもあります。

私は自然に周囲五百メートルの電話網技師になりました。電話線を解明しなければなりませんでしたが、隣の部署も屢々修理しなければなりませんでしたが。間もなく私は驚く程に規則正しい敵の一斉砲撃を体験しました。平静な地形とは別に、もう一つ非常に危険な地域がありました。私たちの部署の様に完全に砲撃を受けない一画も又、幾つかありました。でも、そこから四メートルの処でも決して安全ではありませんでした。百五ミリ砲の時限弾が屢々私たちがいた限界の上空で爆発しました。しかしそこには無害の残骸しか落ちて来ませんでした。閃光は再び現れません。でも、そこを避けなければなりませんでしたが、殆ど何時でも可能でした。この種の数々の作戦区においては、新しい人々がやって来ますし、通りがかりの人々が殺されることもあります。私たちにはその実例が毎日ありました。語られた実例も幾つもあります。ひゅるひゅるという音が僅かにしても腹這いになりますが、何も見えません。私が動き回るのは、お分かりの様

にすっかり静かになる朝の時間を選びました。部署の周りの仕事を私は屢々歩兵隊の中尉と協力して行いましたが、数ヶ月後に彼は殺されました。彼は電気関係の専門家でした。しかしながら電話のことは私と同程度でした。その彼は何時も私を「ムッシュー」（あなた）と呼び、階級のことは決して問題にしませんでした。一番困難な私たちの仕事は、砲弾の穴の中で切れたり見失ったりした電話線を発見することであり、携帯用の電話でテストをすることであり、接続を回復することです。彼は勇者でした。ところが砲弾がやって来ても不潔極まりない泥の中に身を投げて横になりませんでした。私はやはり泥の中でした。私たちの唯一の相違というのはその時に、私の様に侮辱された態勢を取ったことと、彼の様に絶えず敵を罵っていたことでした。私は何も言いませんでした。この素敵な人物は、見ていると私は何時も感じが良かったです。彼は私を、神が知っている場所へ先導してくれた様です。大変幸せなことに、その仕事は私にぴったり合っていました。私の仲間の連中もいる彼の主要な部署では、電話が目立った理由も無く鳴り始めました。私たちは協力してその音を追いましたが、空しいものでした。しかし、私はこの種の電話機をその様にして学んで覚えました。私たちは電話機の内部を見ることは出来ませんでした。熱心に細かく調べなければなりませんでしたが、何ら頼るものも無く腕を働かす必要がありました。この労苦は想像することが出来ません。私たちは順番にその仕事を始めましたが、一回で二、三分でした。部署では同様に勇者たちの水の小樽を一つ発見しましたが、それをブランデーと呼んでいました。私は壺に一杯入れる様にしました。そして、この様にして如何なる種類の勇気も私たちには忘れられませんでした。

私たちの生活は、小さな船の乗組員の生活に似ていました。一人ひとりの能力は、行方術を知っていることに正確に依存していました。そして、その熱意は誤りの無い正義を生んでいました。この〈無線技士〉は、自分の仕事においては優れた職人であり、黒鷲の様に陽気で皆を助けていました。今度は彼のことを語る番です。誰もが砲兵中隊の馬と共に一日だけ大目に見て貰える日がありました。彼らは好きな時に戻りました。私は不定期の休暇を真剣な表情で彼らに告げました。彼らのうちの一人は私の書類を備えて、家族がいたナンシーまで行きました。彼は大変遅くなって戻り、ぐっすりと沢山眠りました。その後で、誰かが彼に何かを要求する間もないうちに彼は二倍の働きをしました。この管理方法を何処まで当てにすることが出来るか、私には分かりません。これは明らかに未来に向かっての一つの見本です。少なくとも実際のこの自由は、自分の手腕と気に入っている仕事が前提となっています。そして一般的には厳しい強制に基づいて行使されることを忘れてはなりません。私はこの班を選抜しましたが、最初は仕方なく集められた人々の間で、私が私自身であった様に、恐るべき権力に従順でした。もしも自然がその様に一種の継続した嵐によって人間たちに影響を及ぼしたなら、自由な人間たちによって一つの共和国が見られることでしょう。余りに恵まれた気候が、一種の自然の果実の様に、専制政治を生むと理解されるのもこの間接的な方法によってです。これらの思想がその時に自然に私にやって来たのは、私の目の前に類い稀な上官がいたからです。彼はメロン号という名の軍艦の艦長で、陸軍歩兵隊の要請でやって来ました。彼の監視用の電話機は有名で、彼自身も疲れを知らずに大胆に仕事をしました。捕虜たちの話によると、ドイツ人たちは彼に「黒い悪魔」という渾名を与えていました。そこからもお分かりの様に、彼は暗色の軍服を着た儘でいました。彼自身は真面目で

言葉少なで、海軍にいる時の様に誰に対しても完璧に礼儀正しかったのです。そして私は、例えば砲弾のひゅるひゅるという音に首をすくめても、彼が恐怖の仕草を表すのを決して何ら見たことがありません。彼が集めた土木工事人の中に、シャベルの名人であるジャンナンがいるのを私は認めました。そして再び満足して格式張ったジャンナンは、私を表敬訪問しました。彼はその日の仕事を迅速に終了した処でした。でも、上官は彼を倍にして働かすことはありませんでした。軍隊の仕事がゆっくりとして怠慢であるのは事実ですが、それは一つの仕事が終わった後に、もう一つの仕事があるのが十分に分かっているからです。そして、別な風に行動出来ない必然性が殆ど何時も説明されているのです。しかしながら息を抜くために日中の僅かな時を自由に使う術を知る者たちは、結局のところ恐らく労働も同じ様に活発で創意工夫に富んだものになるのです。どの様な産業もその点について熟考しなければならないでしょう。しかし、戦争という産業は屢々ひっくり返されて怒鳴りつけられます。

私は間もなく、もう一つの別種の仕事に苦勞しました。命令は、避難所の用地と大きさを調べることから、無線技師たちのために深く研究することまでに達しました。私は又、建築技師の仕事も学びました。そして正確な計画を立てました。その次に、私たちの班だけという方法で避難所を建設する様に告げられました。私は議論しようとして試みましたが、私の言うことは聞いても貰えませんでした。工期が短かったのです。迅速に丸太の交換が行われるのが見られました。我々の危険な小道を三回ばかりそれらの丸太を迅速に運搬しなければなりませんでしたが、それも最も暗い夜でした。私は仕事の分担を行いました。私には今でも右肩にその時の痕跡がある様です。地面に身を投げ出す時には疑問が無い様に、自らを守る時には如何なる方法でも疑問が無く、恐怖による動きには殆どが取り消されれることを私はこの話をしていて気付きました。私は、我が軍の左側の良く知られていた爆発を記憶として思い出しますが、私たちは雄の驃馬に乗るやり方と同じに肩を使って登っていたので殆ど麻痺していました。掘らなければならない作業が生じました。やがて岩が見付かります。鶴嘴の先を使いました。私は軍の建築現場の決まり事を思い出しました。それらの決まり事を一つに纏めた後で、私は自分自身が鶴嘴で掘る様にするのを勉強してから、その日の一斉砲撃についての報告を急いで清書しました。私が戻った時は道具しか見付かりませんでした。私は無言でいましたがそれで十分でした。しかし、私はその時に自分が上等兵であることを感じました。その避難所が掘られて覆われているというのは事実です。そして、私はそこに電話線を運ぶ時に、ピクリン酸を含む強力爆弾の最も大きな爆風を受けました。正面に良く知っている風景と森を見ながら、私は斜面を背にしている時に眼の前で一〇五ミリ砲が爆発したのです。数々の爆発音も納まりませんでした。しかし私は振動と空気の平手打ちの様なものを感じました。私はそれ以上長く覚えておらず、幾つかある金網のベッドの一つに横たわって長いこと眠っていました。茫然自失状態は夜まで続きました。この一撃が不幸を齎したことを私は知りました。歩兵隊の連隊長の避難所では二人が亡くなりましたが、彼らは枝で伸ばされていました。私は少し大きな動揺を感じるばかりでした。同様のことはボーモンでも私に起きました。その時、私は恐怖で茫然となっていたと思います。しかし、このもう一つの経験に倣って私が仮定するのは、活動の規定はまさに恐怖の下にあるということです。その結果には一種の相違がありますし、観念の蒼白さもありません。その一方の人々には、人生に対する愚かさが残さ

れています。私はここに考察のための場所を見出しましたが、それは私が一軒家を持ったエーヌ県にある村のペシーで、私に語られた考察でもあります。しかし、その時の私は大戦を経験していませんでした。村の人々はその地方の深い穴の中に避難していて、長い間そこに止まっていました。そして子供たちも生まれましたが、一人も生き残りませんでした。医者の説明した処によると、それは柔らかい心臓を締め付けたり歪めたりする採光のせいであるとのことでした。

私は、偶然に居住者になったこの第二の村に戻ります。この場所において、私の周りを有益な天才が回り始めました。彼は第十四砲兵中隊の若い大尉で、時々命令によりやって来ました。大変に勇敢で、大変に陽気で、直ぐに私をムッシュー（あなた）と言いました。しかしながら彼は職業軍人の将校であり、T大尉の学友でした。そこから彼は私がいたのを知っていましたし、私を発見しました。私は彼によって、予備役将校で通常はチェックのズボンを着て麦藁帽子を被っている中尉の彼と知合いになりました。中尉はそれでも非常に善良で奔放な弾着観測将校でした。その連隊はタルブ連隊でした。南仏のアクセントで部下たち全員の中で歌っていました。私の班にも二人おりました。そのうちの一人はフォルテユネという名前で、まさに最も哀れな人間でした。若い大尉に関して言うと、彼は私たちの小石や泥の中に宮廷の流儀を持ち込みました。彼は私を、少しも快適で無い彼の監視所へ一度昼食に招待してくれました。ところが取分けその往復は平静ではいらませんでした。溝が一本ありました。それにも拘わらず大変に目を楽しませる花々が咲いている森の中では、溝の横を歩くのが習慣でしたが、そこではつい最近に伐られて、切り株から幾らか離れた処に投げ出された一本の樹木を私は見ました。そして、それは花束の様に鮮やかでした。これらのものは溝の中から飛び出したい気にさせましたが、私はその滑稽さを恐れました。食事の時に、私は他の処で話をしたことがある施設付き司祭のアレルを見付けました。室内遊戯は、私の判断力を心配していた謙虚で内気なこの人物を困惑させることになりました。私は彼を英雄扱いしなければならない様に扱いました。しかしながら彼はそれに関心を持ちませんでした。彼は馬鹿と見做されたくなかったのでしょう。彼は大学教授でもあったということです。自由な教授の目には大学の威光が如何なるものか想像されません。私は最早そのことを考えることはありませんでした。しかし大尉と中尉は、彼に満足していましたが、この英雄は恐怖で死にそうに違いありません。文学サロンが何であるのか人は見抜きます。クローデルの戯曲『人質』は私の蔵書の一冊でしたし、今でも持っています。大尉は休暇の時に読む作品を考えて、同じ作者の戦争詩を私に語りましたが、それは私に嫌悪を催させました。この『人質』という本は、私がポーモンで抱いた文学的慢心という言葉の思い出します。警報が鳴り砲弾の音が聞こえて来ると、私はこの本を腕に抱えていました。私はゴンティエに言いました、「早く戻ろう。もしも『人質』を腕に抱えて殺されたのをバレス(2)が知ったなら、不名誉なことになるだろうからね」。しかしながら、この言葉は本当の感情に一致しています。それ故に私は引き合いに出したのです。そして、以上は砲兵たちのサロンの口調でしたし、そこでは歩兵隊の将校で大学教員でもあるマッソン教授を私は決まって見ました。しかし、彼は数日後に殺されました。私が大変はつきりと聞いたのは、その日の夜に七七ミリ砲の一斉砲撃が二回あり、一回目は彼を避難所から引き出し、二回目に彼を殺したということです。新聞では、彼はアルゴンヌ丘陵で殺されたと書いてありましたが、そこからゴンティエは警句を言いました、「文学者はヴァーヴル

高原では殺される筈がない。アルゴンヌ丘陵ではもっと殺されないよ。あなたに相応しい場所はこちらではないからね」。

私には毎日、電話線の先にゴンティエがいました。私たちが、電話機の中で相手の発する声が良く聞こえていて、私たちの優れた単一アースの効果を確認するのは楽しいことでした。私は採石場の避難所の中でも二、三回それを体験しました。丸一日の休暇中の間にしろ、休暇が始まったり戻ったりした時にしろ、ミノルヴィルにいる時でもそれを体験しました。（完）

（1）サン＝シモン（一六七五～一七五五）は、作家・政治家でルイ十四世下の宮廷生活を回想録に描いた。

（2）モーリス・バレス（一八六二～一九二三）は、作家・政治家で自我の探究から出発して国家主義へ向かった。

第十二章

私は休暇のことは殆ど話しません。シーツの中で眠らずに十七ヶ月が過ぎた後で、私は一回目の休暇を取得しました。そして初日はジャン・ヴァルジャンが司祭の家でした様に、服を着た儘ベッドで眠りました。精神も肉体と同様に野性の儘でした。幸いなことに私は、手薄になったパリのことは何も知りませんでした。悲嘆に暮れて平和を願っていた人々しか見えませんでした。私が出発の時に抱いた予想は全てが台無しになったと言えます。戦場での仕事が、唯一私を戦争から慰めてくれることが出来ました。それ以外の行動は、私には殆どが絶望に極めて近いものでした。そして私は暴動を起こした市民の話を書きたくありません。その様な暴動の思想には絆がありませんし、規律も無く、制度もありません。私は決して暴動を愛しません。その反対に、私には戦争の困難と危険においては寧ろ平等の気質があります。想像力は現実によって自らの限界を見出しました。

その年の春はジュピターが多くの雷を鳴らしましたし、神のこの雷鳴は滑稽の様にも見えましました。我が軍の電線の一本を燃やした一撃や、部署の中の小さな電氣的爆発を私は思い出しています。それは誰も動揺させませんでした。少なくとも私は溶けた安全用のシューズを二十個程取り替えなければなりませんでした。私はこれらの雷雨を喜んで思い出しております。砲兵隊は一瞬じっと動かずにいます。私は不気味な地域を越えるために、少なくとも一度はこれらの暗黒の雷雨の一つを利用しました。私は単に休息に行ったのか休暇を過ごしに行ったのか、私には最早分かりません。その危険地域を私は見ました。閃光が太い枝を取り除いていた音の良く響いた森を、私は毎日眼にしていました。悲劇の物語も眼にしました。殆ど毎日、人間が殺された道も同様に眼にしました。多分、人々がこの夜を去る時は勇者にはなり得ません。それ故に或る日、私は砲火と夕立の下に忍び込みました。大空の騒音が私から他の音を聞くのを妨げてくれました。私は何時も見られていないことを確信しました。栄光無きこれらの出発は、私に待つ恐怖とは異なる逃げる恐怖を経験させました。逃げることにおける不決断は殆どが恐怖そのものです。何故なら避難所が不足していなくても、標識で示されることさえもないからです。しかし、そこから出発することよりも屢々穴の中で飛び上がらない方が簡単です。そして私はその場合に、困難な行動に伴う興奮を決して感じませんでした。それは辛い時でした。

しかしながら最悪なことは恐らく、私の帰還の一つにありました。私は補給用馬車の幕の下に居りました。その日の夜は揺れて騒々しいものでした。御者は酒浸りになっていましたけれども、怖がっていました。馬たちも怖がっていました。暗黒の幕の下で、私は砲弾のひゆるひゆるという音と爆発した音を聞きました。幕の隙間から恐ろしい映像を見ました。その時に馬車から飛び降りて徒歩で道を行けば不幸になります。私は自分を全員の英雄とは感じていませんでした。信者たちが祈りを上げる様に、私はデカルトへの賛辞に専念して、次々にありきたりのことを書きました。それは『精神と情熱とに関する八十一章』の中にありますし、私には気に入っています。私はそこで再び火薬の匂いを嗅ぎますが、最早怖くありません。こうして岩壁の下の避難所に戻って、湯気が立つスープを再び眼にした時は何て幸せでしょう。そこは私の家でした。私

は砲弾の音を聞き分けて、危険でないかを把握する術を知りました。そして、それは電話線を繋いで伝言やその種のことを何時も届けるためのものでもありました。

私は斧を持たされました。退却の時には電話機を破壊する命令を受けていました。私はこの斧を見た時、捕虜になった時のことを考えました。何故なら少しは圧力がある敵の攻撃があれば、予め五百メートル以上を計算に入れて動くことが出来たからです。そして私は罠に捕らえられたとしても、敵はそこから何も獲得しなかったでしょう。敵の穴へ前進することに関心があったのは私たちですが、そこに到達することは出来ませんでした。しかしながら斧への考えは、私には考え深いものでした。私はスプレーや毒ガス・マスクや次亜硫酸塩のビンも同様に好きではありませんでした。〈次亜硫酸塩〉と自然にすっかり名の付いた伍長が、我々の防御施設を屢々調べました。私たちが毒ガスを食らったのは一回だけでしたが、私たちの背後の緑がかかったテーブル・クロスや、下の階に漂っていました。全員が毒ガス・マスクを付けていましたが、私は素顔の儘でいることが出来ましたし、電話機のことにも答えることが出来ました。辛うじて桃の花の様な匂いの波があった様に私には思われます。不気味なそれらの考えは、避けることはもっと難しいものでした。その時に電話を細かく調べなければならないこと、外部へ全て置いて広げること、そしてそれらの損傷を探すことはどんなに幸いなことだったでしょう。全ての装置が医師の診断の様に、私の処に持って来られて、私はゴンティエと同様に自分の声を聞いたのです。それでもまだ言い足りないです。経験はその様な探求において何も導くことが出来ません。どんな電話も主要な同一の装置と同一の電気のスイッチを持っていますが、無数の方法で使います。そして、少なくとも二ヶ所か三ヶ所の故障を持っていることも知らなければなりません。私は、それを自分の仕事にしていたメアナの助けでこれらの探求を行いましたし、彼は旅芸人として全てを行う術を知っていました。彼は全ての喜劇役者に共通している少々気取った礼儀正しさを身につけていましたし、職業によって動作と音声を規制したばかりです。彼は指が器用でしたし、耳は敏感でした。私としては〈常識〉を学びましたし、それが大変に良い道具であることを知りました。これらの探求は不気味な観念を消してくれました。同様に無線技師助手として時々、一人のチロル地方の人が私たちに加わりました。彼はそれをやることしか知りませんでした。腕と手の位置までも学んでいたのも、写真家の様に細かく私たちを調整して大変良く知っていました。勿論、今まで以上に役に立ちました。

飛行機による調整も又、私たちを忙殺しました。しかしながら、それは殆ど何時も約束事でしたし、私は待つことの困難を経験しました。私はフォルテユネと共に標識へ行きました。そして私がフォルテユネの部下たちと、部下たちのための未来の計画を知ったのはそこであり、そのことについて私は相談されましたが、彼は正しかったのです。彼はあらゆることで自分のことには無知で忘れっぽい人間でしかなく、何ものでもありませんでした。私はこれらの対談によって尊敬されました。しかし、その場所は危険でした。そこは穴が少しも無くて短く刈られた芝生でしたが、結局のところは白い標識で飛行機を呼ぶには最適な敷地でした。しかしながら飛行機は来ませんでした。第二一〇砲兵中隊の人々は、近隣の船舶用の大砲を狙って発砲していました。私たちは巨大な底がごうごうと唸っているのを聞いていました。それは恐ろしい音でしたし、至る所から来ている様です。フォルテユネは言いました、「私は古いナイチンゲールだから、私を信

じなさい。私たちにはここは側面よりも悪くないのです」。その時は、知らせのあった飛行機を空しく待ちながら、私たちは時間にして三時間も座った儘でいました。フォルテユネの部下たちはその様にして教育され、導かれ、案内されて、初めの頃以上に高められました。しかしながら私たちにとっての状況は最良になりませんでした。しかし、単純な人間が自分を越えて考えるのは如何なる様相なのでしょう。私たちは、牽制攻撃で私たちの電話避難所の上空に達した砲弾が炸裂したのを二、三回見ました。私たちがこの光景を見たのは横からでした。炸裂の前には照明弾の小さな煙が曲線を描いているのが見えました。砲弾を見ている気がしました。穴の中から見える所にいた人々は、全員がその度に潜り込みました。この奇妙な光景の後で、私たちは対談を再び続けました。友情による勇気と呼ばれなければならない模倣による勇気は、際限の無いものです。しかし、恐らく大きな危険によって私たちが駆け回ることはありません。勿論、恐怖心はしるしで判断します。それなのに、やる事が無い時の無為による恐怖心が最も怖いものなのです。(完)

私たちは五月頃に交替させられました。或る晴れた日の夜に、全ての班が補給車の中で移動しました。しかし喜びも混じっていました。偶然により、或る砲撃で私たちは道に沿って行きました。私たちは爆発を、音響を聞く前に、大気現象の如く見る事が出来ました。馬たちは大急ぎで行きました。私たちも間もなく安全な所にいました。ロワイオメイで宿泊しましたが、私が王の様に眠ったのは屋根裏部屋でした。翌日は葡萄酒と豚肉の日になりました。私は、師団が取得した軍隊の灰色で塗られた二輪馬車で、御者と一緒に旅をしました。中尉は代弁者の務めを私に依頼しました。「何故なら、将軍は規則に則っていないこの乗物に気付いて、あなたに説明を求めることはあり得るからだ」と彼は言いました。私はソーセージを全て食べながら、答えの準備をしました。そして実際に私は、私自身は軍人は願い下げで、その種の他のことも願い下げであると説明しました。軍人たちが立派な話に無関心であると信じるべきではありません。しかしながら私には説得力を必要としていませんでした。そのうちに私たちの小さな縦隊を批判するのを見出していた連隊長が現れたのです。勿論、彼は私の知合いでしたし、二輪馬車のことも知っていました。私は立って敬礼しました。私のアキレウスである二輪馬車の上では優雅でもありました。その後の日々は睡眠と饗宴でした。ムーズ県は楽しかったです。私にはやるべきことは何もありませんでした。師団は私を招待客扱いにしてくれました。しかしながら私は兎に角、砲兵中隊に再び一緒にならなければなりません。私は、昔の私の生徒で何事にも非常に厳格であったG大尉の命令権下で過ごしました。全く親切でしたが最早私の上官でない様なT大尉と共に、この第十四連隊の若いG大尉の家ではやはりコレッジの生徒の昼食にはなりません。そこで私が大変に僅かな時間ですが、既に十分に知ったのは金モール二本で底の無い帽子に白い十字架のある牧師でした。学者ぶっていてお喋りの彼は、あらゆるありふれた考えを上手く操って言っていました。彼は私たちの昼食を台無しにして仕舞った様です。若いG大尉は、ムーズ川沿いの草原を自由に走っていた彼の馬たちを私たちに見せてくれました。そのことについて我々の仲間であるT大尉は言いました、「あなたは運が良いですね。もし私が自分の馬たちを走らせたなら、脚を折るか溺れるかするでしょう」。これは奴隷からの困難な自由への移行であり、彼の同僚が答えたのです。楽しい話をして時は早く過ぎました。帰りしなにG大尉は、私が午後を何処で過ごしていたのか、そしてもし自分の休暇が取れずにこの場にいなかったなら私は退屈したに違いないことが大変に良く分かりました、と私のことを言いました。これは彼が私に示した唯一の特別待遇のしるしです。兎に角、彼はそれを私にしなければなりません。

私たちは何時も戦争よりも一歩進んで、村から村へ行きました。しかし、ヴェルダンへ行くことを前提にしていました。誰もが順番にそこへ行きました。それは本当のことでした。私は道路での事故で出発に失敗しました。私は殆ど全ての宿泊を司令官の老いた馬上で行いましたが、それは私には慣れっこになっていました。私は従順なこの動物が自慢でした。しかし、馬術は穏やかなものであっても、最初は疲れます。私は軍用運搬車に席を取りました。車の揺れは半分程の障害物でも私たちをひっくり返しました。そして、馬たちがそこから私たちを引っ張りました

ので、私は足を車輪に取られて折れたものと思いました。しかしながら、苦痛そのものの上に輝いていた考えも大変良く思い出します。私はひっくり返りましたので、半分ぼうっとなっていました。「戦争は私にとっては終わりました」。私には信じ難い喜びでした。でも、この喜びは大変に心にも無いものです。何故なら、うんざりして良いものでも何でも癒やすからです。従って希望は屢々裏切られます。私は、歩兵の鏡であるサンピックの様な人物を思い出しておりますが、彼は結局熱を出して幸運だったのです。彼は本当に熱を出しました。従って本当に幸運だったのです。それはフリレイの町に入る際に、私の部署で起きました。ところで彼は自分の病気を発見するにつれ、この幸運が彼を治したのを私は見ました。私にとっては、戦場の埒外にいることの幸運で、歩兵たちに欲しいと思う気持ちにさせた驚くべき捻挫の苦痛にも容易に我慢しました。話が先に行き過ぎます。今は病院を探し求めて私はロレーヌ地方への道で、あの二輪馬車の中に居りました。かくしてその夜に、私はタントンヴィルに到着して、荷物の様に降ろされました。病院は良く知られているレストランの中がありました。それは軽傷者のための小さな病院でしかありませんでしたが、戦闘地域における行政権に含まれていました。これは彼らにとって重要でした。病院内においては治らないでいても気楽です。しかし、足を痛めた人々においては回復だけが問題になっていて迅速に扱われます。そこにいたのは捻挫が二人、斧の一撃で負傷した者が一人、車の事故が一人、ヘルニアが一人、フルンケル(1)が二、三人、リウマチが一人、その他は軽傷者たちです。捻挫をした二人以外は、誰もが多少なりとも走ることが出来ました。捻挫をしたもう一人の者はチェスで遊んでいました。彼は幸運でした。マッテイと自ら名乗っていたこのイタリア人は、イギリス軍の志願兵を募集するための軍隊の呼びかけによってアルゼンチンからやって来ました。彼は現在ではロレーヌ戦線で移動衛生班の車の運転手をしていましたが、足が動けなくなっていました。夏の到来がまさに告げられました。病院中の病人や看護婦や医者たちは、私たち二人を除いて田舎へ出掛けました。この状況の中で私たちは、将軍の肩書を持った検査官の医者を極めてきちんと迎え入れましたが、彼は私たちの前では愚かな儘でした。これはまさに彼の芸当だったのです。チェスの勝負が全てであったマッテイは、イタリア人とか恐らくイギリス人が行う何らかのくすくす笑いを口に出してしていました。そして、この状況に引き込まれた私も、驚くべきことに愚かな人間の振りをしていました。私は誰が茂みを砲撃したのか知りませんでした。病人や医者や看護婦たちが戻って来るのが見えました。そして、あの検査官の声が部屋に鳴り響きました。「私は何を発見するのだろうか。一種の〈イギリス人〉とその相手の愚かな人間であろうか。又は文盲とか何かであろうか」。看護婦たちは笑いこけて死にそうでした。というのも私の万年筆とノートブック、そして私が持ち回っている鞆の中にある『谷間の百合』と『パルムの僧院』の二冊の小説には敬意が表されていたからです。看護婦たちは尊敬するだけで満足していました。しかしマッテイは何らかの救いと共にバルザックを発見していました。『谷間の百合』の私の序文は短いものでしたし、次の様な内容です。「これはナポレオンの百日天下の間のトゥーレーヌ城の話です」。これはそんなにも悪いものではありませんでした。センスのあったマッテイは、フランスの小説を大変簡単に沢山読みましたけれども、バルザック風の語彙や、文学的言葉に属していない農業のことには無知であったことに気付いたと言っていました。このバルザックが有名な作家であったかどうかを私に尋ねながら、存在に値したこと

もつけ加えながら彼は推論しました。そのことによって栄光は様々な外観の下に表れるものであると私には思えます。私が床の上で足を引きずり始めた時、マッテイは回復していました。それはチェスの終わりでした。

私はこの大戦の間に、チェスのゲームを沢山の仲間たちに教えました。そして、大変に共通した間違いに私は気付きました。それは彼らがゲームのルールを理解した時、最早決して相手にぶつからないことが安全であると思うことです。若い者たちは精神に高尚な観念を持ちました。チェスのゲームで気付くことは、如何なる事件も無ければ術策しか無い如く、全てが準備されて計算されていなければならないことです。しかし、数々の関係の複雑さが閉じられていますけれども、思いがけないことが沢山ある、一種の〈宇宙〉を直ぐに作ります。それは人間の手による一つの偶然の様なもので、最早感動しかありません。もしもそれが無かったなら、全てを計算する競技者たちがゲームの楽しさを失うことは間違いありません。私のために、そして純真な相手の前で、私はパニックと驚きを生み出しました。情熱に賭けました。しかしながらマッテイと一緒にですと、二、三人の人々と一緒の様に私は精神力が決して間違いを改めないことを覚えました。無鉄砲と計算の丁度真ん中に私はこのゲームが与え得る、恐らく最も生き生きとした喜びをそこから引き出しました。その様に程々に取り憑かれると、それはまさに戦争の一つのイマージュになるのです。

もしも考えることが無ければ、人は病院で何をするのでしょうか。私は電話局で哲学者たちの哲学の手ほどきをすることが出来た一種の〈概論〉を書き始めましたが、少なくとも大学の教授たちのものを手ほどきすることではありませんでした。最初の観念はバカロレア合格者の質問が私に齎されました。彼は、デカルトの「我思う、故に我あり」とは何であるのか、ロックに代わってその哲学に存在した一つの形式を尋ねて来ました。私はひどい語呂合わせで答えました。「我好む、故に我あり」。しかし、その質問は道を進んで行って成功しました。そのバカロレア合格者はドイツ語を知っていました。彼はナウエン⁽²⁾からの公式声明を訳すのを引き受けましたが、それは私たちの無線技師が一文字ずつ受け取ったものです。この歩兵はそこを離れたので、私はドイツ語のこの公式声明を毎日待っていた作戦区の将校たちへ渡し始めました。激しい抗議文も幾通かありました。その後、私よりも殆どドイツ語を知らなかった化学者に助けられて、私は外国語翻訳交通隊を巻き込みましたが、私は心配しています。というのも専門語の意味は、長時間調べた後でないと明らかにならないからです。この紆余曲折があつた後で、私は〈概論〉に戻り、病院で終えることが出来ました。そして、それは『精神と情熱とに関する八十一章』の表題で大戦の終結前に出版することになりました。この本は余り大学教授を意識していない様に思えます。でも、戦争はそこから消えていました。

真の問題は、人々が苦難している時には至る所に置かれています。その病院も戦争だらけでした。歌でさえもそこでは恐るべき音響になっていました。疲弊した連隊が通過しました。リュックサックで体を曲げた新兵たちを眼にしました。私は、歩くリズムを急がせる息切れのする喇叭の様な音が今でも聞こえて来る様です。青春時代は歳を取ってどうかして仕舞ったのです。私たちのベッドの上では、どんな歩兵も一日とか二日の間、ヴェルダンのことを考えているのが見られました。若い軍医が彼らを上手に治療しました。軍医はリユーマチ患者を探していました。

そして上手く発見しました。その様にして軍医は一週間とかそれ以上看病しました。しかし話す言葉は悲しいものであり、そして最悪の沈黙がありました。現世はこうなのです。神は、掃いている司祭の姿をして私たちの間にいましたし、大変下手に掃いてさえもいました。神は私たちに箒を渡して逃げましたが、その代わりに兵隊の大外套の下に、私たちの心を温め直すミサという一種の葡萄酒を持って来たのです。この哀れな人間は概略を掴んでいませんでした。私は、新聞に出ている大虐殺の記事を読んだ時の愚か者に対する恐ろしい動作を彼に見ました。彼は一頭の馬を笑うことが出来るのと同じ様に笑いました。しかし待つて下さい。日曜日に私たちは女性や子供たちの限りない流れの中に、戦争の不気味な行列が通り過ぎるのを見ました。葬式だらけでした。時代に倣っての〈聖体の祝日〉だったと私は思います。群衆の列には常に敬意が払われます。しかし、その終わりに私たちは何を見たのでしょうか。金色に着飾った我々の看護人という愚者は、移動天蓋の下で神を持っていました。若者たちに私は何らかの信仰心や祈りの欠片も見なかったのですけれども、その日から彼らはそのことを考え始めました。お分かりの様に私には思想は、常に窓辺によって発見する様になりました。

マッテイは自由思想家でした。この言葉だけは私にはどんな職業よりも重要です。しかしながら私は気の弱い話を恐れました。その点に関して私が言うのは一つだけで、ナンシーの看護婦長と彼との会話だけです。彼はミサへ行くことも、聖体を拝受することも拒んでいました。その夫人は、彼が犬の様に生きて死ぬことがまさに自由であることを単に彼に忠告しました。その時にマッテイは知識が無くてもソクラテスになったのです。彼は言いました、「犬の様に生きることですか。私はそれが何であるか分かっています。というのも犬たちは立ち上がりますし、飛び上がり、ついには角砂糖を貰うためには何でも構わず行うのを私には分かっているからです。そうではないのでしょうか。大変結構です。しかしその時、あなたが望んでいることを行う私の哀れな仲間たちに、あなたが用意しているカフェ・オ・レやその他のものの特別待遇を手に入れるのと引き替えに、もしも私がミサや懺悔等々へ行ったなら、その時は私が犬として生きて死ぬだろうと私には思えます。あなたは本当だと思いませんか」。この女性の精神を明らかにするのに必要なものがありました。しかし、看護婦長は色を塗られた偶像でしかありません。

我々の看護婦たちは、恐ろしい移動衛生班において形づくられたもう一つの様相を呈していましたし、私たちの家で休息していました。私は三つの動きだけでベッドを仕上げる彼女らのやり方に感嘆しました。決定的な時間での感嘆を私は、彼女らに発見したのです。その上、彼女らが口論で熱くなった時には、あらゆる名前に通じていました。彼女らは私が薔薇とヒナゲシが咲く戸外へ行く一歩目を支えてくれました。彼女らはどんな歌でも歌いました。日曜日には、私たちは一人ひとりが冷たいビールの水差しを受取りました。私は冷たいビールが何であるのかを知りませんでした。皆殺しの天使(3)によって、私たちはこの樂園から分散させられました。彼は確かに秩序だった新しい医者であり、それらの秩序は自然に適していたものです。私たちは全快したいと思っていました。私の捻挫も同じで、すっかり薔薇色になって列車に乗らなければならなくなり、私に約束されていた二十日間の休暇もたった一週間になっていました。私は自分の本分に身を引き締めましたし、不足するものは何もありませんでした。しかしその中で私は、精神力が打ち破られているのが分かりました。私はゴンティエから何通かの手紙を貰いましたが、慰め

にはならないものでした。砲兵中隊はヴェルダンにいて、砲弾がそこを叩きのめしていました。シャンパーニュでは砲弾が脇に落ちましたが私たちには全く自然であると思われた、と彼は書いていました。何故このヴェルダンでは砲台や避難所に正確に落ちたのでしょうか。少し後で私は、飛行機の偵察による調整が全ての理由を説明しているのを知りました。実際にヴェルダンでは、敵の飛行機も砲台による一斉砲撃を絶えず調整していましたが、シャンパーニュでは行えなかったのです。我が軍の数々の飛行機がそれを阻止していたのです。彼らは大空の勇者たちです。

(完)

(1) フルンケルは、黄色ブドウ球菌による毛孔皮脂腺の炎症である。

(2) ナウエンは、ドイツ北東部の都市名である。

(3) 皆殺しの天使は、神がエジプト人の第一子を皆殺しにするために遣わした天使で、聖書の「出エジプト記」に記されている。

ところで余りに陰鬱な休暇の後で、私はアルク＝レ＝クレイの軽傷者施設近くに、足を引きずりながら居りました。私がそこで見たもののことは既に述べました。しかし、医者たちのことをこれからお話ししましょうか。この問題について私は長い間、つまり約二週間程考えて沈黙して来ました。でも、ずっと考えていた訳では無く、私のやり方ではありませんが瞬間的な閃きによって考えていました。それは全てが大変誠実な懷疑論者のものと見做していた或るマルクス主義の雑誌を読みながらも、本当の革命的な精神というものからは絶対的に離れていました。これらのことは私を笑わせます。しかし、それは私を下士官の医者たちの処へ立ち戻らせましたし、私の裡に目覚めました。それと同時に私は少しも隠さなかった大変に生き生きとした感情と思い出があります。それは私には隠す理由が決して無いし、読者諸氏にも非常に抑制された散文に大変良く再発見する術を知っているものです。私はここでそれ以上の自由を私に与えます。私がもっと個人的な形式で、大変に平凡であると分かっている感情を何故述べないのでしょうか。それは少なくとも私が我が国で言わなくても、至る所にあり、政治的と読むことを可能ならしめているものです。そして、それ自体の記号化によって全くの嘘つきになっている、と何故私は述べるかも知れないのでしょうか。私に言わせれば、恐らくどんな国においてもありますし、間違いなくフランスにもあります。私たちは人間に対して、殆どの人間に反対させられたり、従順にさせられたりします。そこから一種の均衡が生まれて、一方では反乱が生じ、他方では多少なりとも暴君が生じます。そして、この音が聞こえて来ない隠れた闘争は、開かれた闘争には不完全に対応するだけです。従って私は他の場所よりももっと自由に、もっと十分に今は政治的分析を試み様とすることを十分に理解します。この分析は、暴君たちが正確と見做すのを好む師団では部外者のものです。何故なら、その様にして暴君たちは全ての野営地において味方を発見するからです。これらの予備折衝に関する指摘は、大変に近い処で私を感動させる事例によって、もっと明白になるでしょう。

私はオルヌ県を出ました。そこはナポレオンが治めた第一帝政下において最も逆らっていた県であっても、擬装されて孤立したこの地方を知る人々は、ふくろう党(1)の蜂起の精神が永遠のものであることを理解しています。しかし、この地方を徒歩で回った私の友人は、主としてアランソンやモルターニュの地方には彼が主張する限りは私自身と同じ様な人物を何人も見付けて、大変びっくりしていました。私がそこの地方出身であるのは偶然でないということです。私はそこの地方の人間です。ところが、組織や運動における私の仲間たちは、デュゲ・ド・ラ・フォコヌリやレヴィ＝ミルボアや、最後にはミルランの有権者たちなのです。権力に反対することとは、根気良く向こうへ追いやるのが明らかです。王は、これらの王党派の人々と共に大変に困惑するかも知れません。教育は自然の儘の本性に、付け加えることしか行いませんでした。十五歳の少年の想像力において常にあるのは、声まで模倣する程の或る手本となる人です。ところが最初の本で付与した私の手本となる人は、数え切れない対談を持つ弁護士であり、好み为王党派の人で、仕方なくナポレオン支持者であり、偶然にもブーランジュ将軍(2)支持者であったりした

のです。それ故にこの人は陰謀を企てるまで行ったのです。ところが私は実在する権力者たちへの批判に関する声が、その人と一緒に大変良く聞こえました。そして彼が望ましいと判断した権力者たちに関して私は、決して何も彼に同意しませんでした。更に彼が私には尤もだと思うことも、私は調べました。今度はあなたが未開人を理解して下さい。彼は給費生としてパリにやって来て、〈自由思想〉を教えて生活費を稼ぎました。ここでは皆と同じ様に、そして決まり文句を取り除いて、私は私を知る半分の人々によって支えられ、そして他の半分の人々と戦っているのだと思いました。これらの二つの半分の中には、最も異なる人々である両親、政治家、同僚、上司、検査官たちが分散されていました。それ故に交際によるのと同じ様に直接、私は公式の地位と現実の地位の間を、今も既に私が行っているのと同じ様に分析させました。そして今と同じ様に、その時に私は敵の軍隊が臆病に行動することに気付きましたが、それらの行動に対しては恐れずに歩き回るだけで十分でした。でも、何故でしょうか。彼らは野心家であるのと同様に、臆病者でもあったということです。これらの容易な勝利を自由な精神ならどんなものでも知っています。私がロリアンやルアンで先導した一種の政治闘争や、ドレフュス事件とその後にあった運動に対応したものを語っているのではありません。私が時には外国との同盟を受入れたこと、そして治安関係の諸君が時々私を大衆に有利な様にして少しはあからさまな称賛を手に入れたりしたことは、見抜かれて分かっていることと思います。私は、この小さな恥を容易に濯ぎました。私が、その集会はつまらなかつたとか重要であつたとか語った時に直ぐに私が理解したのは、私に賛成なのは私が半分大胆であり、私に反対なのは私が半分臆病だったことです。従って時々私に賛成なのは一人の人間として半分自由であり、私に反対なのはもう一つの半分の女性警官であることが私に起こりました。あらゆる人々が私の裡に野心を探しましたが、結局のところは企てに関して少し不可能な謎めいた人物であると私を判断したのです。この者には決して野心がありませんでしたし、企てもありませんでした。彼自身としては、どんな種類の独裁者たちに対しても戦った民衆の人でしかありませんでした。私が孤立していなかつたことは良くお分かりのことと思います。大学はこれと同じ文筆の鳥を一羽ならず提供しました。しかし、戦争が私たちの敗北を明白に確認したことも明らかです。それから忍耐です。他者を与えることでしか主人から解放されない、とは既に言われたりしません。私が開けっぴろげに政治の未来を拒んだ理由は理解されています。しかし、今はその主要な理由を述べたいのです。そして、それはどんなに思い上がった場合でも、生理学的なものなのです。政治的な闘争が少し継続すると、私は最早繰り返して言うことしか出来ない疲労状態に、直ぐに私を追い込む経験をしました。如何なる政治家でもこの困難を乗り越えませんでした。それはレーニンやドイツにおいて明白です。休息することに極めて巧みなイギリス自身も、私がこれを書いている一九三一年の今も又、政治的に極度の興奮に陥っています。非常に確かなことです。そして、どんな対価を払っても、そこに至らない様に避けなければなりません。

私は軍医たちを全然信じていないと、あなたは思っています。仰る通りです。そこでは私は戦わずに勝利しましたが、それは学者ぶることによって勝利したのです。最初はボーモンでしたし、砲兵中隊の軍医によるものですが、彼とは私は一言も言葉を交わしませんでした。尤も彼は熱心でしたし、献身的に仕えていることを示していました。独裁者の力とは最早恐るべきものでし

かありません。彼は腸チフスに対しての予防接種を私にすることを約束して、そして実行されました。私は年齢により免除されていたのです。少なくとも私を大変に好んでいたT大尉の一寸した過ちが無くても、殆ど全てが軍医の処から動き出しました。軍医は自分の地位によってワクチンには自由でしたので、口に出して私に相談するのを楽しんでいました。私は言いました、「年齢によって私は免除されていますが、もしも私が自由であったとしても、私は止めるだろうと思います」。私は、医者たちについての話を何か付け加えたかも知れませんが、その答えは数日後にやって来ました。というのも、書かれた命令様式に基づいて全てが分かるからです。私は直ちに予防接種のために部隊へ、つまり森へ歩き出さなければなりませんでした。もう一人の大尉が私に命令を伝えました。私は、私の権利を引き合いに出しましたが、医者はいくらの事柄に関して何であっても唯一の判断を下せる人であることを大変理性的に答えました。私は遅刻した者と一緒に出発しました。そして私たちは間もなく池の端にある森に居りました。それは最も美しい季節であり、最も美しい散歩でした。私には議論する考えはありませんでした。その上、その他の数々の危険に立ち向かう決心をさせられるや否や、汚れた水での注射に勇敢に立ち向かわないのは不条理である様に私には思えました。注射は横柄な手で、それなりに沈黙の中で行われました。帰りに私たちは、砲撃が五百メートル先を上手に突き破っていた一本の道の上に二人して居りました。私たちは敢然と事に対処しました。すると或る歩兵が言いました、「彼らは怖がらない砲兵たちだ」。本当は歩兵たちは、砲弾が無尽蔵にあつて神秘の源泉のもの様に見做していました。その代わりに砲兵たちは、砲撃が一つの管理的なものが与えた時に終了することを知っています。爆発音は或る時から聞くのに慣れて来ます。それは地図を見ただけで行う砲撃であつて、着弾の調整が無かつたのです。その砲撃は、私たちが慎重さに従つて行動する時には止まりました。従つて私たちは、砲火を通して伝えている者たちには一層大胆な様に見えました。五百メートル先では最早既に勇気を判断することが出来ません。ワクチンに関しては、この薬を部下たちは死ぬ気で飲んでから二十四時間は眠るものと思つていました。私は殆どこの治療に従いましたし、汚れた水の問題も最早ありませんでした。

良くご存知の様に、他の支隊にいる医者たちもおります。私は既にタントンヴィルの軍医のことを話しましたが、彼は生命に関わる数日間だけは歩兵たちに留意するだけで、他に心配していない様に見えました。私は、自分の話をする準備が出来上がった時点で、部下たちを戦場へ送り返すための方針を持っていた医者たちに出会いました。最初に出会った人は保管所の医者で、偏狭で意地悪でした。更に私たちが素っ裸でいたことは恐らく想定外です。ところが彼は理性の働きを見出しましたし、決してその儘にして置きませんでした。「休暇に入る時に治るでしょう。あなたも休暇に入ったから治つたのです」。彼はどんな希望も閉じ込めて仕舞いました。しかし私は立派な話を用意しました。「私は表現するために如何なる不平もありませんでした。私は任務に戻る状態にあるのかどうかを単に自問するだけで、それを決めるのはあなたです」。彼は私を更に学者たちの方へ送り届けましたが、彼らはグレイ駅で仕事をしていました。私の話は絶対に本心からのものでなかつたことに気付いて下さい。ヴェルダンに怖かつたですし、それは大変自然なことでした。グレイ駅では、裸足でいるのは私だけでしたし、私は上半身が裸の歩兵が異常な火傷痕を負っているのを観察しながら待ちました。試験所の責任者でもあつた軍医は、気

泡の端にコンパスを当てる方法で肌を調べていましたが、この方法で彼は矛盾した解答を手にして、そこに虚偽を幾つも見ました。もしも触診が二回とか一回だけであっても、お分かりの様に触診だけで言うのは困難なことです。私が祈禱所の道具の様に、気泡の端のコンパスを知ったのもそこです。その歩兵はこのちぐはぐな抗争の中で諦めていました。私はどうかと言うと、真っ黒な地面を素足で単に歩くだけでした。私が朝には両足を洗っていたこと、そして全身も洗っていたことで人は十分に思いたいのでしょう。ところが私は、放射線科医の処へ直ぐに移されて、傷ついた足は火花に曝されました。眼鏡を掛けたその人物は若くて陰気でしたが、恐らく自分の仕事に疲れていたのです。彼は先ず私に次の様に言うのでした、「時々足は洗っているのですか」。私は答えました、「はい、時々洗っています」。同じ口調で答える権利を持たない人間を嘲笑するにしても、どれ程十分に臆病でいられるのでしょうか。この若くて哀れな者は、私が友人たちとの夕食時に再び見出すのが好きに違いない人々の一人なのです。私はここで同種のもう一つの事例を引用したいと思います。それは私が証人になるしかなかったものです。それは一九一七年にデュニー飛行場での私の任務が終わった後でした。その兵士は大学教員で、優れた能力を持った自然主義者で、知識と忍耐にかけては比類無き者でした。彼は特にイギリスの天気予報に関する我々の報告書を、秘密の数字にして伝える役目を与えられていました。勿論、彼はまさに完璧に全て行いました。ところが、彼は宿営地で補給を引き受けていた中尉に、食糧についての権利を要求したりしていましたが、彼は私たちの集まりを前にして、そのことを正確な言葉で作成しました。従って彼は数字の上からもその準備態勢を嘆いていました。このことのために中尉は言いました、「多分、君はコックなのですか」その忠実な人間は顔を赤くしました。私が既に見ていた歩兵の顔になりました。そして無言でいます。新米の独裁者になった歩兵は、そのことについて大したことではないと言うのでしょうか。そして今度は彼自身が独裁を行う望みを持って、他の者たちに言葉を曖昧に言うのを私は良く聞きます。独裁が決して行われたくない人々や、独裁を行いたくない人々のことは決して斟酌されません。しかしながら少なくともそんな人々が半分は居りますし、最悪なのです。この些細な事件はまさに反乱の時代に生じます。それが私たちの反乱を説明していました。名誉とは、もっと適切に言うなら、偉大なことよりも些細なことを誇りとします。というのも、その時は恥をかかせる意図しか注視しないからです。

私は同じデュニーの宿営地で、医者たちと一緒に他の災難にも遭いました。一度、一分遅刻したお陰で、私は非常に若い人から罵詈雑言や脅迫的言動を被りました。要するに私には大変に正当な遅れた理由がありましたけれども、私が間違っていたのです。私は彼のお陰で恥を掻きました。しかし私は、別の機会に私のために恥を掻きました。私は未だ若々しくて、ひげを逆立てて、新品の服を着た愚鈍な人の前に居りました。その人は人が良さそうでした。彼は言いました、「ねえ、おじいさんですよ」。それからパリでの危険な伝染病についての話を私にしました。幾つかの質問には答えを望みましたが、それらの答えは愚かなものでしたし、正確には私という人間をものにするためだったのです。その様な検診をしなければならない恥ずかしい状況でも、人は良く思われたいのです。私は自分を、民衆の人間であり無学であると感じています。私が独裁者としての奇妙な印象を覚えたのは一回きりです。私がそれを忘れることは決してありません。どんな権力にも拒まなければならないと私は確信した儘です。これは権力者たちに対し

て最も有効な姿勢であり、そして謂わば最も無礼な姿勢でもありました。自由への道とは今でも明らかになっていないのです。

グレイ駅の無礼な医者が、私の足の骨を検査する時になりました。私は彼が望んだ様に答えられないので、最早一言も言いません。すると私の足は治ったと見做されました。度重なる無礼でしたが、有利な結果も生じました。その無礼が誇りを目覚めさせたのです。それは戦争への真の発条になり、無言の発条にもなります。私が数々の体験を既に話した後で、銃後へ送られる様にならなければならなくなったのは、別の理由からですが、それは間接的なことです。しかし、私が先程話した小さな恥辱と共に話を終わりにするために認めなければならないのは、そのことに関する間違いは私にあったのです。私が何者であったかは至る所で知られていました。つまり自分の職業としては恥ずかしくないやり方で知られていた一人の教師であり、自分の職業によっても年齢によっても、どんな兵役からも免除されていたのですが、軍隊へ志願した私は特別待遇の取扱いをされていました。私が知られていなかった場合には、私は自己紹介するしかありませんでした。そして私は、臆病にならず不器用にもならず話をし、それらを行う術を良く知りました。そして更に自分のことを話さなくても、直ぐさま階級を拭い去る全てのことを話すためにはアカデミー・フランセーズのやり方があります。大変巧みに部隊のあらゆる人々を軽蔑していた我々の無線技師は、社交界の人の様に、やがて如何なる中尉でも構わず一緒にいたことに私は良く気付きました。これは会話のお陰でした。例えば、私とは全然知り合いでなかったこの理工学校出身の中尉は自分の身なりにもそれを否定しません。私は、ポワンカレ（偉大な人）や仮説としての実用主義的な学説を引用するために少しは話をさせねばならないだけでしたし、如何なる観念の支えもありませんでした。彼はこの出会いを喜んでいたのかも知れませんでしたし、彼は中尉にも必ず言っていた様です。「我々の処には、ここに大変注目すべき人物がいる」。そして、この中尉でさえも五分後には私を、犬の様には取り扱わないに違いありません。しかし、これは私の考えではありませんでした。私に与えられたこの種の尊敬は、私には嬉しくありませんでした。それは私が単に、単純と無知を前提とした人物として尊敬されたいと望んだ人間の様なものです。かくして私は平等を理解します。かくして私は平等を試みます。私は会話に注記を齎しませんし、書いたものにも注記を齎しません。私はまさに知らない様に見えるのを望みますし、それは私が知っていることも忘れる様に仕向けます。少しは私と顔見知りの人々にさえもそうしますし、私は彼らが期待する以下の者の様に見えます。そして彼らは屢々安直な餌食に飛びかかる様に、私に飛びかかります。友人は数人いるだけですし、この種の恐るべき術策を知るのを学んだ沢山の生徒たちがいるだけです。この術策は私には自然なものです。何故なら、いずれにせよ私は、私自身と一緒に動物も生むからです。それは知性の最初の瞬間を拒むための私の方法です。それは宿営地で私に与えられた新しい足場です。要するに私は現在の創意工夫しか資質に期待しません。私はそこで走り回り、そして何時も打ち勝ちます。極めて十分に武装したこの種の反乱を、全てすっかり阻止する術を知るには、軍人しかおりません。しかし私が、何時も使われているが屢々良く隠されていて、本能によるかの如く私に対して敏感なこのやり方の中で見るのものは、あらゆる種類の不公平の唯一の源泉です。それ故に先ずはそのものの中で、そしてどんな人間の中でも、最初に話をする人である連隊長を殺さなければなりません。以上は、私

が平和と呼んでいるもう一つの戦いです。（完）

（１）ふくろう党は、一七九三年にフランス西部で結成された反革命王党派で、ジャン・シュワンらが農民蜂起を指導した。

（２）ブーランジュ（一八三七～九一）は、陸軍大臣（一八八六）になり、対独強硬策で人気を高め、第三共和制打倒の中心人物となった。

私が短靴の紐を結んでいる間に、そして私がこの意地悪な猿の様な放射線専門医から永遠に別れる間に、私自身と共にこの種の何らかの話の想像して下さい。私は再び曹長の配下になりました。精神力の高さは大変に良好な状態の中にありましたが、横隔膜が弱っていました。勇気の問題はその疑問が確認される時に、単純な言葉として自任します。荒廃した戦場が意味しているのは、一度も見たことがないが話には聞いている鉄の数々の部品が、あなたが通らなければならない場所に大変な速さで往来していることです。これらの脚力は、そこからあなたを導くのを拒んでいます。その様な脚力に対して私は或る朝、一度か二度喇叭の不気味な音を聞きました。分遣隊が招集される運びとなりました。私の順番がやって来ました。上等兵として私は、砲兵と六人程の歩兵の先頭におりました。私たちは終わりが無い軍人の旅に出ましたが、大変に短いと感じられることもあります。歩兵たちは私にリュックサックと銃を預けて、次々に消えました。彼らが戻って来ないと分かると、私はこれらの品々を駅にいる司令官の処へ運びました。又は寧ろ、決して驚く顔を見せなかった伍長の処へ運びましたが、彼は私に言いました、「彼らは戻って来ないだろうな。あなたは彼らが何処へ行って欲しいですか」。もう一人の砲兵と私は、〈冷酷な制度〉によって地面を這わされる儘になっていました。簡単に言えば、光が入らず窓ガラスも無く、無言の人々で溢れた小さな列車は、その日の朝に檻樓小屋だらけの憲兵たちのいる村で、傍線を引いて勘定に入っておらず空腹になった私たちを下車させました。私は人間や馬たちの通過で磨り減ったこの地面に見覚えがありました。一日中足を引きずっていた私は、小さな谷へ降りて行き、泥に沿った茂みしか見ずに私が眠る草地の三角形を悪戦苦闘して見付けながらも、全員が似ていて同じ高さの処にある馬の尻に再び乗りました。私は食糧と葡萄酒を供給されました。憲兵たちは殆ど私に関わりませんでした。私は最早背後から押し出されないで済む地点から前線に近づきましたが、前方から射撃されました。私は散歩者になった様に一種の中立地帯を数キロメートル走り回りました。憲兵たちはさっさと姿を消していました。ゴンティエが私に与えていた諜報活動に帰った私は、前進する道路を横断している煉瓦造りの橋の上を、鉄道線路が通っているのを眼にしました。そこには私の場所があり、友人たちも居りました。私は、完全にびっこを引きながらそこへ走りました。私が知っている食糧・宿舎係の下士官は、鞍の上に私の荷物を運んでいました。私たちは所謂デ・クレ・シューヌの森の中にある道を通ってそこにいたのです。私はそこに、どんな風が吹いても開いて仕舞う段ボール箱の小屋を発見しました。季節は未だ九月になったばかりでした。私は樹木の下に幾つかの馬銜（はみ）を垣間見ました。偶然にも私は司令官とT大尉に出会いました。彼らは私には真剣で疲れた様子に見えました。これからの私はT大尉の命令で動くことを知りました。私は、明らかに軍隊の堅苦しさが無くて渴望していた会話が出来る様になりました。彼は私を射撃用の上等兵に任命しましたが、それは私を彼の人格に結びつけるための一つの方法でした。当面、私はびっこでしたし、その日の行進は翌日に傷痍軍人としての足を軍医に診せるものとなりました。それ故に泥だらけでしたがここの森での休息は、たっぷりと一ヶ月ありました。私は時折、砲兵中隊の連中と、取分けゴンティエと再会

しましたが、彼らの話は怖いものでした。怖いものは何も無いと見做していた若い中尉が、私には意気地のない様子を見せました。そして、何時も良く知っていて動じることのない私の心の平安を羨望しているとさえ言いました。この称賛は私を動揺させました。私は、それと同時に最も卑しむべき想像力による恐怖を覚えました。それは足が凍傷になって私の病気に加わったことから生じたものであるのか、確かではありません。しかしながら、勇気が無ければ決して多くの人間は存在しません。T大尉が、天気予報の仕事に真つ当な人々を任命しなければならなかったのもこの頃です。彼は私に言いました、「あなたと相談せずに私は任命しましたよ。私たちが持っている能力を合理的に使うことが重要ですからね。あなたは何時もびっこを引いていますし、あなたが適しているのはこの仕事です」。従って私は自分の要望に署名しましたし、私が認めなかった希望によってですが荷が軽くなった様に感じました。そして、その後間もなく、より一層機敏になった様にも感じました。

第十四砲兵中隊のこの親切な大尉は、小さな谷のもう一つの側に小屋を持っていました。私たち二人の間には泥の河しかありませんでした。しかし、読者は馬の腹が触れる程の泥の観念をお持ちになるのではないのでしょうか。泥と言っても絶えず打ち付けて、泡立っているかの如くです。泡だったそのクリームは恐らく何らかの観念を与えるでしょう。従ってその土地を知っていた人々は、耕すことが出来る様になるまでは大変に長かったに違いないと言っていました。事實は、泥が乾燥したそれらの場所では一種の石が出来ていました。植物を生長させたその土地は、泥でも砂でも煙でもない人間の産業を生むことになります。車で泥を運搬することは砂漠を物語りました。まるでアッティラ⁽¹⁾の様でしたが、草原は最早馬たちが通れる場所ではなかったのを私はその時理解しました。第十四砲兵中隊の馬たちは従ってもう一つの斜面にいました。そして、その夜にはベアルン地方⁽²⁾の人々が「ピレネー山脈」とカナポリ民謡の「サンタ・ルチア」の合唱曲を歌っているのが聞こえました。それは一般的なことで良くあることです。しかし、彼らの声は一般的ではありませんでした。それらの歌声はお互いに不思議と親密になりました。そして一定間隔を置いてテノールの声が、他の人々によって声を上げていたかの如くに飛び出して来て、大空までそれらの音響を放って行きました。この友愛の感情は又ロシアの合唱曲からも聞こえます。親切な大尉が、屢々私を良く招待したのだと思われています。或る夜に、私は顔まで泥だらけになってランタンを持って到着した一人の人物を見ました。彼は又、小さな通知状も持っていました。翌日、私は親切な大尉に言いました、「もしあなたがその様な時刻に、又誰か使者を送り出しても、私はもう来ないかも知れません」。しかし、大尉は黙っていることなく言います、「何故ですか。それでは台所にいるだけで大変満足している臆病者になりますよ」。昼食の音が余りに取るに足りないものであることは見抜かれていましたし、社交場の音も同じです。フランシス・ジャムが友人であった中尉は、友人の本を私に読ませたがりました。中尉は、私がそこから考えたことを知りたがったに違いありません。私は中尉自身が考えたことを尋ねました。「私ですか。あなたは私がこれらの愚かな本を読むとは思わないでしょうよ」。その本は孤児の様に放って置かれた儘でした。アレル神父の上品さは可能であったものとして手本にされました。そして、私は選ばれた会食者として輝いていました。私はこの種の冗談には非常に才能があるだけです。しかし臆面も無く真実が時々示されました。戦争になる数ヶ月前に結

婚させられた大尉は、休暇で帰還することを言いました、「私は知り合いでもない女性と結婚したのだ」。別の日には、「私は小さいが、大きな馬を持っていることにあなたは気付きました。全く私は馬から落ちるのが怖いのだ。従って負傷者になると、この上なく滑稽だろうよ」。少し後になって、私が砲兵中隊に再び追いついた時、大尉は頭を負傷していて、一ヶ月も経たずに病院から戻って来ました。彼は私に言いました、「私は愚か者で負傷した。その日の朝、私は洗面器を持って避難所を出たのだ。敵の砲台の一斉砲撃があったのだが、幾つかの破片が私の処まで飛んで来た。私は洗面器を持ち帰ったが、その時に私が思ったことは、敵の意志を受け取って私は理解することであり、それが打ち勝つ自分を認めることになるということだ。私は洗面器を持って再び出掛けたのだ。そして私が頭に一撃を受けたのはその時である。その勇気について書けるのはあなただけだ。そのことを記憶に留めて置いてくれよ」。如何なる敬意も無く上官のことを語って来ました。大尉は言っていました、「敵は私を苦しめない。敵は自分の仕事をしていて、大変上手でさえもある。私を苦しませるのは私の上官たちである」。誰にでも語るべき話がありました。人々は自分なりの観念を持っています。しかし彼は、私が彼の地位に身を置かない一人であることを思い出させました。そこはシャンパーニュ地方でした。少佐は老いた雌鳥の様に電話機の前で呻きながら飛び上がっていました。「彼らは矛盾した数々の命令を私に与えているのである。彼らとは全て二人の連隊長だ」。私は言います、「電話帳の中で最も高齢で偉い人は誰であるのかを探さなければなりません」。このことは行われました。そして、それが軍隊的な解決だったのです。

これらの対話の中で親切な大尉は、穏やかな戦線の話をしました。或る将軍に関する話は、少しも一般的なものではありません。彼は砲兵中隊の処まで来ましたが、悟られるのが怖くて単なる歩兵に変装していました。その砲兵中隊は良く楽しんでいました。その大尉はこれと同じ戦線において、ドイツ人たちが自分たちの国であるが如く、列を成して散歩していた通りを遠くから見ました。しかし、そこは決して彼の戦線ではなかったのです。ところが何発かの砲弾を発砲する提案がなされました。その当時の戦争は、原則に倣って管理されていました。そして原則として隣の戦線に当てられた目標を、当方が発砲する必要は無いのです。それ故に討議し、相談しなければなりませんでした。それから何が行われのか、あなたをご存知ですか。関係のある戦線において十二発程の砲弾が用意されて、その大尉の大砲はそれらを発砲する許可を取りました。一人の砲兵が彼の前で発砲します。モールマールの戦線が地獄になった当時に、それは私がフリレイで行った考察を私に思い出させました。一本の道で、所謂森の中の道は、右側の戦線を制限していました。この道の向こう側は全てが静かで、一方も他方も同じでした。事實は、この同じ前線には我が軍の石切場があつて、大変激しく攻撃されても大変上手に防いでいましたが、左側の戦線は百五十ミリ砲によって徹底的に砕かれたかも知れませんでした。私がこのことを指摘した時に、或る将校に言いました、「あなたは兎に角黙っていて下さい。歩兵はそんな考えは決してしません」。私はこれらの事例を自分で抑えます。この種の皮肉はかなり理解されていますが、尤も何も導きません。私は寧ろ、キャベツや葡萄酒や砲弾や色々な荷物を大変上手に教える管理された機械の様な人に驚く様に勧められました。何故ならこの世のどんな勇気をもってしても、軍隊では情報部の命令がないと何も出来なかったからです。しかしこの大尉はその上、優れた砲

兵であっても何も尊敬されませんでした。彼は行動と同じ様に、その話にも大胆で無謀だったのです。

T大尉は少しも好かれていませんでしたけれども、結局のところ私は恐らく彼が一番好きでした。彼が我々の森に休息を取りに来た時、彼は又私を招きました。そして彼は私の上官でしたけれども、彼は階級のことを全く忘れていました。勿論、彼は命令と服従のけじめも、より一層適切につけていました。それから少し後で、私たちは先任者たちによって密かに備蓄していた砲弾をトーチカへ移さなければなりませんでしたが、司令官は勘定に関しては大変なペテン師でも知りませんでしたけれども、彼が極めて正確に砲弾を数えていたのを私は見ました。T大尉はこれらのことを簡単に、そして熱心に受取りました。そうしてこれ以上はもう考えませんでした。平時以来、T大尉は皮肉な仲間よりも遙かに早く進歩していたと私は思います。彼は芸術家でした。私が受取った簡素な絵葉書も彼を何時間も夢見させて、デッサンや絵画について際限無くお喋りをさせるのでした。芸術家としてのこれらのとりとめの無い話にも、大変平凡な混乱がなくても私は驚嘆しました。そして、その正しい答弁を探しながら私は美学体系の輪郭を認めました。これらの幸せな時間も持つために私たちは戦場の多くの場所を移動しました。これ以上に最良なものは何でしょうか。補給用の貨車が死体を運ばない昼間に彼は、殆ど絵葉書無しでは過ごませんでした。そして私が昨日夕食を食べた仲間も屡々一緒でした。ゴンティエは大目に見られていました。しかし、戦場の脅威は継続していて、彼の堅固な決意は当然でした。私が帰還してから少し後で、彼はフォンテーヌブリーへ行って将校になることを受入れました。Wに関して言うと、私が不在の間に彼は隣村のヴィニエヴィルで殺されました。彼のことを考えると気が晴れませんでした。

この種の待遇以外では、私は殆ど炭焼き人や樵の様に生活しました。厚紙製の屋根を支える四本の杭と、一つの机と、幾つかのベンチを想像して下さい。そこで私は蠟燭が消えるまでチェスをして遊びました。揺らぐ微光が一本か二本の幹と泥濘の小道の始まりを照らしていました。この背景は私にとって二つの情景を思い出させました。一つ目は次のとおりです。砲手の服を着た一人の樵が両手で本を読んでいたが、私はその夜しか見ませんでした。私は彼に私の本しか見ません。というのもその主題については、私は決して忘れない決まりを持っているからです。

「お前の未来を知ろうとするな。それは禁止されているのだ」。しかし、私は易者の声を聞きました。重大で正確で節度のあるその言葉に私は驚嘆しました。時々彼は言いました、「この戦争で殺されないだろう」。他の人に対しては、「近いうちに重大な事件があるが、死ぬことはない」と言いました。そして、「判断力に関しては少しも持たないし、決して持ったことがなかった」と言いながら、下士官の手をぞんざいに拒絶している彼を私は見ます。真実はそれだけです。他の予言に関してその手は自分で確かめていました。その手が関係した者は、胸を馬の後脚で受けてもやっとの思いで治しましたが、その様にして戦争が終わります。私はその点に関して少しも決められません。言うべきことは沢山あります。私は、私たちの領域の生活と、野生の背景と、これらの予言の間での調和に気付くために自分を抑制します。ミサは私に不快感を与えました。従って調和の感情が、信仰と呼ばれているものの全てであると思ひますし、信仰を禁止することは重要でなく、既に他の多くの思想を持つことが重要であると思っています。それ

は殆どスピノザが情熱に関して言っていることです。従って両手によったこれらの未来の思想は、樵や聴衆や私自身という樵の妻その人に適していると私は考えました。

二つ目の思い出とは音楽のことです。私たちは蠟燭の明かりの輪の中に他の砲兵中隊の二、三人の仲間が夜に姿を現すのを見ました。一人は第十八砲兵隊で借りたヴァイオリンを持っていて、最高音のE線の弦は鋼鉄線に変えられていました。私はパガニーニが弾いたかも知れない様に、そのヴァイオリンを手に取り演奏しましたが、それは私の人生で最初で最後でした。何故なら別な言い方をするなら、私は下手にしか弾けなかったからです。知っていた全てのロマンスがそこで弾かれました。彼らは劇場にいるかの如くに聴いていました。泥だらけの小道から、誰も知らない酔っ払いがやって来たのはその時です。服には泥が付いていて、片方の手で私たちの小屋の杭にしがみつき、そしてもう片方の手で音楽会の指揮を執っていました。幾つもの曲の題名とか曲の始めの音を言い、そして本物の愛好者として拍子をとっていました。突然に蠟燭が消えて、全てが終わりました。その酔っ払いも消えました。彼が何処から来て、何処へ行ったのか誰も知りませんでした。

樵の妻の様な私の生活は、その様にして繰り広げられました。そして、私は何時もびっこをひいていました。しかし、郵便物係下士官が言った様に、「この生活には確かなものは何も無いのです」。或る日、正午丁度に私は指揮官の通知状を手にししました。「大尉からの命令である。C上等兵は食糧を持って砲兵中隊へ参上すること」。一通の命令は数々の思考も終わりにします。夜が更けると荷造りをして私は、照準手と一緒に無蓋馬車の上に居りました。そして私たちの方へ横揺れする飲料水の小さな樽を、懸命に足で押さえていました。前方には二人の御者と四頭の馬がはっきり見えました。そして全てのものががたがた揺れて道を登ったり降りたりして進みました。最初は程々の揺れでしたが、間もなく殆ど進んで通れない程になりました。馬車は傾き、樽は転がりました。これらの計り知れない夜に、一度ならず砲弾の積荷が流されました。馬車を立て直して積荷を作り直さなければなりません。T大尉は良く私に言っていました、彼は補給のこの仕事を感嘆していましたし、この仕事は不可能なものと彼は判断したので、監視することには嘗て十分に用心していたとのことでした。その時、御者たちが手綱を緩めると、馬は地面に鼻を付けて穴を探しながら巧みに引っ張って行くことを彼らは語ります。乗客にはこのことは何も見えません。しかし、他の者のから聞いたり見たりします。その日の夜にヴェルダンへ北上した人々が、猛火を映し出した様に見えた空を、何時かは忘れて仕舞うと私は思いません。そして騒音に関して、大きな障害物が動くような想像力でも乗り越えます。その夜の騒音は普通でしたが、雲は火事の様に見えていました。

二つの砲兵中隊がボア＝ブリュの窪んだ道で忙しくしていましたが、まさに地名の強さからは隠れています(3)。この窪地の上方は未だ余りに高かったのです。そこに達するにはよじ登らなければなりません。この登攀には、騒音が脅迫的なものになっていました。幾つもの爆発が、私の仲間の照準手の目当てによって真ん中辺りで起こりました。しかし大きな音にも鼾をかいて寝ることが要求されました。でも、車の中では勇者になれません。もう一人の砲兵は地面を跳んで知っている道に行くのを信じて選択しました。私は不決断に苦しみながらも、足で樽と戦いながら独り残りました。ついに私たちは一つのランタンの明かりを見ました。そして台所の

前に到着した時に、何時もの様に正直で礼儀正しいジャンナンが現れました。彼は私に挨拶して、私の荷物を取り、彼の後を付いて行く私を迎え入れましたが、まるでホテルのドアマンの様でした。一瞬にして私も彼と同じに物静かになりました。暗いその夜には、少なくとも彼はこの小道に専念するだけでした。五分後に私たちは、すっかりきれいに片付けられていて、余り飾り気がないが十分に明るい避難所へ降りました。そこは監視者たちと一緒に私の住まいになりました。私たちがいた処は高所であり、そして我々の砲兵中隊がいた盆地の殆ど左側でした。私たちの処には、驚くことに鉄板の保護板で備えられた煙突がありました。砲弾で正確なほど細かく切られていた森からは、罅が入って良く燃える薪を私たちに提供してくれました。この場所においては、そしてこの地層は十分に厚くありませんでしたけれども、もしも外部の爆発が屢々蠟燭を消すだけであったなら、私たちは静かにしていました。トランプをしたり、食事をしたり、眠ったりして、私たちはこの様にして時間を過ごしました。任務の間隔は大きくなった儘でしたし、私の間隔も一段と大きくなっていました。しかし私が付近を歩き回った時、不気味な印象と、外にいることで自然な恐怖を私は十分に受けました。敵との距離は遠くありませんでした。私は五分間監視所にて、十分間大尉の避難所にいました。監視所で私は、我が軍の砲弾が落下するのを見詰めていました。ある時はセディルと命名されていた敵の塹壕の手前でしたし、ある時は向こうに落下しました。私は有名なコルボーの森を見ましたが、我々の森よりももっとばらばらに砲弾で刻まれていました。そして私が隙間から右側を見ると、ムーズ川の蛇行が見えましたし、その向こうにはブラバン村が見えました。その夜は、順番でしたので私が歩哨に立ちました。穏やかな数時間でした。僅かに監視のために敵の砲台が間隔を置いて時限弾を数発撃って来ただけでした。以前の夜の様に、一斉砲撃の音が連続して聞こえることは最早ありませんでした。轟音は雷雨によっても蘇りましたが、その時は耳を聳する程に恐ろしいものでした。

殆ど毎晩大尉は、私がブランデーを飲める様に招待してくれました。でも、それは彼の口実でした。何故なら彼は少しも飲めなかったからです。そして彼は別の方法で心意気を示さなければなりませんでした。彼の喇叭手とコックであり私の古い友人でもあったモープーが私に直ぐに言いましたが、大尉は以前と大変変わって優しくなり、敵の陣地に迫る対壕に殆ど降りなくなったとのことでした。大尉は戦争を忘れる練習をしていたのであり、そこに到達したのであると私は理解することが出来ました。私たちはモンマルトルのアトリエにいるかの如くそこに居りました。従って私の美学についての考察は熟成し始めました。もしも誰かが専門の話をしたとするなら、それは私でした。私は観測した砲撃のずれも諦めませんでした。ずれは時々嵐となって吹く風に特有のものに見做しました。風が鋼鉄の小さな塊である砲弾に著しい影響を与えることを、大尉は信じませんでした。彼には機械技師の精神も、幾何学者の精神もありませんでした。私は、九キロメートル先の目標を砲撃するには、砲弾をどの位の高度に上げるのかを知りたいと思いました。彼は千メートルであると言いましたし、多くの人々が言っているものと信じていました。私としては、この推測に従って描かれた軌道では不可能であると判断しました。私は三千メートルと推測しましたし、それでも正解よりも低いと自分では信じていました。私はその時、フォンテーヌブローにいたゴンティエに手紙を書きました。彼は慣例通りの書式を私に送りましたが、多分それは間違いであると彼は書いてありました。恐らく間違っていたのでしょうが、少なく

ともありそうなことでした。今でも私はこの問題に直面していました。三千メートルの高度の風とはどんなものでしょうか。そのことを知ることはなげれば、そして私が間違っ探求することになるなら、戦争の終わりまで精神が休まらなくなります。パリの人々が良く知っているベルタ砲(4)に導いた大砲の問題に私は陥りました。少し前から風によって敵の前線から、既にフィリイにいる私たちの処に子供たちが遊ぶものよりも少し大きいな赤や青の風船が到来していました。これらの風船が何の役に立つのか誰にも言えませんでした。軍隊内ではもっと長い時間を掛けてそれを知ることに着手しました。セオドライト(5)の方法で風船を観察しながら、色々な高度の風向きを測ることを学びました。素早く解釈出来る表が計算されましたし、それと同時に大砲を撃つために修正された表も別に計算されました。私たちが砲兵中隊で過ごした間には、これらの表は一つも使いませんでした。しかし少なくとも一ヶ月後に私は、様々な高度の風の速度と方向を天気予報と一緒に毎日受け取りました。それは多くの会話の主題になりました。私は、ついに長い糸に繋がれた風船を想像しました。糸の角度は、風の働いた力であるとの考えを与えることが出来ました。最後に私は、気象予報官になりましたが、その方法と職務を学びました。

私は先程、ベルタ砲のことを話しましたが、我が軍の砲兵たちにとっては予想も出来ないものであり、まさに信じ難いものでした。私はこの非凡な発明のことは何も知りません。しかし私が推測するのは、軌道の驚くべき高度に注意が喚起され、大きな砲弾の発砲にはそれだけでも高さ六キロメートルの処へ行くことでした。稀薄な空気の高さを通過することは、それだけでも多少なりとも軌道が短縮すると推定するのは怪しまなければなりません。敵の砲兵たちは曲射か迫撃による砲撃でも、彼らの最も強力な長い砲弾を試みて驚くべき成果を得ていたと私は推測します。そこから彼らは百二十キロメートル先からパリを砲撃しに来たのです。そして、この出来事で最も驚くべきことは、終戦後に大砲を発砲した地点や大砲そのものの痕跡を、どんなものでも隠すのが容易でなかったのに発見されなかったことです。大砲の発明そのものに関しては、この種の他の機械の大成功同様に、私は余りびっくりしませんでした。私は一つに纏められた複数の大砲の威力を容易に理解します。そして、力学的なこれらの全ての成果は、嘗て蓄積された仕事量の問題とか、もしお望みなら金銭的な問題でしかありません。我々の砲兵たちは一生懸命に発砲しながら、そして近い処の発砲音に従って遠い処の成果を判断している時、それは最初の動きでしたが、少しは幾何学者の様に私には見えませんでした。

夜になって大変遅く、監視所にせよ避難所にせよ私は戻りました。その時は都合の悪い時でした。その場所は着弾で掘られて、めちゃくちゃにされていました。鐘の様に時限弾が鳴っているのを私は屢々聞きましたし、それらの閃光は石の上に乾いた騒音を生んでいました。訓練された耳を持っていた友人のモープーは、それらの騒音を観察して、動くのに有利な瞬間を私に教えてくれました。(完)

(1) アッティラ(?~四五三)は、フン族の王(四三四~四五三)でゲルマン諸族を征服して中央ヨーロッパを支配するが、カタラウヌム平原でローマと西ゴート連合軍に敗れた(四五二)。

(2) ポーを中心とする南仏の旧州で、今日のピレネー=サドランティック県にほぼ一致する。

(3) ボア=ブリュは地名であるが、直訳すると「ごわごわした粗い森」である。

(4) ベルタ砲は、ドイツ軍がパリ砲撃用に造った長距離砲である。

(5) セオドライトは、目標物の高低角と水平角を測る光学器械で測量や天体観測などに用いる。

この頃にドオモンは取戻されました。そのことは我々の右手にあるマール城塞の斜面の上で、最早敵が見渡していないことになりました。そして大尉はこの地方における、砲台の可能な設置位置を偵察しなければなりませんでした。私は角度を測る軽量な器具と大縮尺の地図を持ちながら、大尉に同伴しました。それは大した危険も無い半日仕事でした。しかしながら私は、我々の右手の奥地にあった農家を砲撃した恐るべき百三十ミリ砲が消えているのに気付いた通路を思い出しております。ひゅるひゅるという音がする度に、大尉は頭を引っ込めますし、私も大尉と同じ様に引っ込めました。面白いのは私たちが二人で地図を広げていることです。私たちは注目すべきあらゆる地点を発見しては目印を付けました。その後で監視地点であった弾薬の古い保管所に到着した時、私たちは誰もが騙されていることに気付きました。ゴンティエのいる処に到着しないのです。何故ならこの計画に関しての報告は、大尉の仕事でもあったからです。結局のところその仕事は行われたのであり、しかも上手に行われたのです。私たちは明るい気分で再検討しました。それから大尉は、最良の陣地を確実なものとして私に告げました。私としては金利生活者の様な楽な仕事でした。彼はもう私を扱き使おうとしませんでした。少し後で言ったことですがそれは正しかったのです。私は休暇に入っていたからです。彼は年取った民間人たちと活発に話しましたが、彼らは気さくな言葉しか使いませんでしたし、その時の彼らはお手本に報い得たのでした。「あなた方はそれをあなた方自身に見ます。その仕事は危険になり得るかも知れませんが、厳格ではありません。そして自発性という個性は、多くが勇気を高めるために生まれるに違いありません。私たちの部下たちには、その様なお手本が大いに必要とされているのです。そして彼らが八十歳になった時に彼らも到達出来ると良く言って下さい。彼らは結実するでしょう」。彼の考えは正しいと私は信じます。そして私がその時に理解したのは、片足が駄目になった私であっても守れると彼が思ったことでした。その時から彼は、うっかり秘密を漏らすことや諜報部とかその種のものについて、何か形式張らない話を私と行うつもりでいました。防衛上の意に反していても、部下たちは自分たちがいる場所を書いたり言ったりすることを自らに禁じていませんでした。でも、郵便物係下士官が、未亡人に手紙を書くために彼女の夫がどの様な村で埋葬されたのかを、記載する時は改竄されていました。それでも、そのことや他のことにも感謝していると大尉に手紙を書いていたのをその未亡人から知らされたのは、自然なことでした。部下たちは、これらの詳細なことが何ら重要なものではないとは理解しませんでした。彼らは正しかったと私は思います。非常に広く伝えられていて、しかも非常に巧みに指導されていたスパイ行為に対して、私たちが知ることは重要であったとは全然分かりませんでした。私たちはヒンデンプルク・ライン⁽¹⁾の後退にびっくりさせられました。誰もが未だ信じ様としなかった時に、それは行われました。私たちはシュマン・デ・ダム⁽²⁾にもびっくりさせられましたが、その時私たちの師団は北部に集結しました。しかし、このスパイ行為の教条主義と大変合理的な情報の合致方法は、そこに参戦している人々を熱狂させますし、それらを考え出した人々は更にもっと熱狂させます。私はこの種の学習を行う必要がありませんでしたが、それは良かったです。

前もって言います。私は既にボワ＝ブリュにいました。この場所は危険でした。しかし私は自由に動きましたし、偶然からですが巧みに一人の人間を救います。私たちの避難所の端も、八十八ミリ砲の恐ろしい一斉砲撃を導いていました。全ての戦闘員たちは、このオーストリアの大砲はその音よりも速く砲弾が到達することを知っていました。或る夜、私たちは外にいました。私たちのうち一人は美容師の腕を持っていました。私たちは二発の爆風で避難所へ飛び込みました。三発目の砲弾の爆発は、殆どまさに私たちがいた場所で起こりました。二発が相次いで不発なのは珍しいことであり、ありそうも無いことです。何故なら、こちらには理由があっても、あちらには理由が無いからでしょうか。私は今でも百三十ミリ砲のことを思い出しますが、八十八ミリ砲と同じ位に速く、威力はまさにそれ以上です。それはポーモンでは私の鼻下で殆ど地面の下に入っていて恐ろしい唸る様な音を出しています。奇妙なのは、その長い砲弾が地面から出て来て今までよりももう少し遠くの空中で爆発することです。もしも各々の爆発が他のものと異なっていて、それぞれの詳細は特異で、謂わば例外的であることに気付くなら、それらの紛れ当たりにも少しもびっくりしないでしょう。小石と閃光の束による人物の正確な表情は唯一の出会いでしょうが、もしも前もってそれを描くことが出来たとしても全く疑わしいものです。事實は、全ての部下たちは殺されていませんが、注意力と避けるための術は同じ様なものであり、車に乗るのと一緒です。私は私のお手本に戻ります。もしも私たちが騒音や煙の中の大砲周辺で忙しく立ち働かされていたなら、砲弾の予告音を聞かなかったでしょう。私が殆ど何時も自分で見出していた比較的自由的な状況においては、怖い目に遭っても危険ではなくなります。何かの料理を作る時間が堪え忍ぶ間であっても、大変に滑稽な怖れの機会は多く無くなりました。何故なら腹這いになる前に鍋を置かなければならないからで、不決断があなたに働くからです。私は祝祭の時の昼食を思い出しますが、私はそこではスープを運ぶ人であると感じました。そして私は油で焼いた六つ程のオーストリア産の羊の股肉にびっくりした時、砲弾の並外れた集中砲火が起きて長く続きました。股肉は運命に任せることであり、その次には戻ることです。再び穴の中へ飛び込むことです。待つことであり、聞くことであり、荷物を引き受けることであり、走ることであり、焼肉の横で腹這いになることであり、結局のところ股肉と彼を救うことでありますが、それはそんなにも高尚な仕事ではありません。最悪なこともあります。新芽が吹く頃でしたが、不幸な男がズボンを履き替えて脱走しました。名前の分からない、栄光も無い不幸な人々の悲惨事が幾つもありました。大虐殺に関しては、一撃でなぎ倒された砲台の班があり、火薬庫の砲火は幾つもあり、私は恐怖を抱く様な話を沢山聞きました。何故なら、私たちから三百メートル離れた処で何回も起きたからです。しかし私は決してそこにいませんでした。戦争は遠くにしかない光景です。

しかしながら或る朝、私たちも一つの光景になりました。八時頃でしたが、家の中は全てが静かでした。洗面器とタオルで顔を洗うのに忙しかった私たちは、ヴェルダンの方を見ました。つまりヴェルダンの背後や右の方に欠落した大聖堂の影絵が見えました。一斉砲撃の多くの砲弾がそこに落ちたのです。時々私たちは砲火と煙を見ることが出来ました。私たちを愚かな儘にして置く出来事が生じたのはこの時です。同じ場所の方向に、爆発というよりも寧ろ千台もの砲台の大音響を伴った噴出が生じたのです。赤褐色の大きな雲の中に数え切れない程の砲弾が爆発した

のです。その全てが大空で生じました。その様なものからは何の考えも無い儘でした。人々は夢ではないかと疑います。しかしその日の朝、私たちは実際に体験した時間を持ったのであり、驚きの印象を実感したのです。というのもこの爆発は恐らく二時間も続いたからです。私がそのことを書くのは、まさに丁度その時にそのことが言われていたのを私は思い出しているからです。殆ど私は今ではそれを信じる事が出来ません。私たちはもう少し後で知ったのですが、タバンのトンネルが吹き飛んで、何千人もの人々が亡くなりました。人々が語った処によると、このトンネルは巨大な共同寝室と事務所を伴った火薬と砲弾の倉庫になっていたのです。私がその日に見たものは、噂から聞いた他の色々な災難を測る一種の基準を与えました。そして私は、戦争を語る色々な本の中の如何なる話からもそのことを発見しませんでした。私はイギリスの港でピクリン酸爆薬を一杯に積んだ船が吹き飛んだ話を引用しても、不確かな夢の様なものです。その衝撃で何千人もの人々が殺されました。私はドイツの或る村で有毒ガスが沢山貯蔵された場所の爆発も引用しますが、そこでは一万人の住民が死んだと言われていました。平和になってから農民たちが私に語った処では、シュマン・デ・ダムの下流にあるプールの町近くの弾薬保管所が爆発しました。それはニヴェル攻勢の時でした。そしてその人が言ったのは、私も知っている一軒の農家のことです。それは事件があった処から一キロメートル近い丘の上であって、火薬が置かれていたとのことでした。私はそのことを屢々思います。何千人もの犠牲者のことも思います。熟考から力の蓄積、つまり労働の蓄積までの機会には決して限度がありません。それは人間の労働でしかありません。決してピクリン酸爆薬や雷酸塩やマスタード・ガスが自然の中にあるものではありません。そして化学は、ハンマーから他のものへの一撃をつけ加えるための一方法でしかなく、謂わば一時中断したエネルギーをその中に保存するための一方法でしかありません。証拠は人間の労働が巨大な超過分に委ねていることです。何故なら、結局のところ人々はこの巨大な発条を目指して更に食べて、着て、住んでいるからです。しかしながら多くの人々が忙しくしているのは壊すためでしかなかったのです。労働のこの力は、まさに人間の群衆以上には想像出来ません。或る賢明な農夫が一発で七五フランから八〇フランまでの砲弾を日中のみにおいて、一キロメートル四方の作戦区内で発砲するのを計算している声を私は一度ならず聞きました。人々は尋ねました、「支払いは全額でどの位になるのでしょうか」。労働が行われて労働者が生活した以上、人が消費するもの全てにお金が支払われるのであると私は自分自身に答えました。しかし私は多分、余り簡単にこの考えを敢えて提案しませんでした。そして、労働や富や超過分や浪費癖とは何か、私は大して前進しなくても、もう一度探求します。何故なら、飛行機の形をして空中で爆発する実際の労働と、空想上の本当らしい借金や財産との間にどんな関係があるのかです。しかし同様に誰が数々の種類の展示や、銀行家たちの虐殺を行うのでしょうか。一方は他方に結び付いています。しかし、その関係は何処にあるのでしょうか。無数の虚構が、数々の種類の変わり易い夢想を形づくって実際に多くの富を生むからでしょうか。そして今度は戦争の番であり、戦争は労働の一種の保管庫を展示することでしかないのでしょうか。どんな弾薬の保管庫も最後には有害である様に、どんな権力者も最後には有害になるのでしょうか。もしも人々がエネルギーを蓄積すると同時にエネルギーを思考したなら、その努力を慎重さからきちんとした地点へ持って行かせるでしょう。経済学の中に欠けているのは物理学なのです。(完)

(1) ヒンデンブルク・ラインは、ドイツ軍が築いた要塞群で、大戦当初はパリ付近まで攻め進んだが、第一次マルヌの戦い(1914年9月)などで後退した。

(2) シュマン・デ・ダムは、北仏・エーヌ県中央を走る道路で激戦地となった(1917年4月)。

私は無線技師だったCを少しだけ見ました。彼も恐るべき穴から少し離れていましたが、反対側の穴でした。彼も又、食事の時間に一度ならず生命を危険に晒しました。敵の砲弾には、今では衝撃に大変敏感な照明弾も備えられていました。穴はまさに少しも深くありませんでしたし、破片は殆ど地面すれすれに爆発しました。シャンパーニュ地方での破片は最早垂直に噴出しませんでした。それまでは見物人でいられる距離でしたが、今では接近する程の距離になりました。でも、ジャンナンはそれらのことには少しも心配しませんでした。彼が自由に行動を定めていたのは本当で、私が彼以上にもっと細かい音を聞く耳で知ることが無かったのも本当です。クレール＝シューヌ野営地の曹長との沢山の口論の後で、その歩兵隊で過ごすのを一度ならず要求した後で思い出すのは、ジャンナンの無視するやり方でした。彼はこの危険な地方で誇りを回復したのであり、飛行機を見分けたり合図したりする役目を与えられていて、肩からは斜めに喇叭を掛けていました。私がモールス信号を笛で彼に教えたのはこの頃です。二回の講義で計三時間足らずでした。それに反して新聞を読むことは少しも進歩しませんでした。彼は音で文字を解釈する術を覚えましたが、彼の注意力は全てがそこに使われました。決して意味に関わるものではありませんでした。抽象的観念は彼にとって何ものでもなかったのです。モールス信号は、私たちの授業において単純で、日常用いる伝言以外には少しも表しませんでした。従って、たどたどしく読む代わりに、ここで彼は非常に早く見抜くことを学びました。たどたどしく読むことは一つの合理的な方法ですが、恐らくそこから抜け出すことは出来ません。技術的知識を伝えることは、あるいはこう言っても良いのですが修辞学の知識を正確に認識することは困難であり、恐らく不可能です。それは地位があってそれらに専念する人々には不安です。

私たちの班は、より一層若い新兵たちが少しずつ来て一新されました。新兵たちの中には吃りが一人いましたが、健康で勇敢な兵士でした。彼は大変上手に歌いました。歌っている時には吃ることはありませんが、吃りであることは容易に分かりました。彼が自分の意見を押し進めて主張しなければならなかった時の苦労は、それらの意見を変えることを思い止まらせました。私はその時、雄弁家としての何かを理解しました。私はジョレス(1)においてさえも、山の如く文章をかき立てる優れた吃りの何らかの動きにびっくりしたことを思い出します。その爆発は確信を生みます。私はそれを私の吃りの裡にも大変良く観察しましたが、吃りも砲弾の中ではありきたりのものに変えて仕舞いました。その様にして、私たちの大変に自由奔放な会談において彼は、極端な臆病による余儀ないアクセントによって、どんな独断論にも連れ戻しました。例えば彼は全てが戦争であり、給料のための戦いも戦争であり、どんな競争も戦争です。従って戦争は何時もあるだろうと主張しましたし、何時も怒りっぽくなっていました。私は、戦争への気力が名誉以上に多くの関心が無かったことを指摘しながら、この屁理屈を何回も解きました。勝つための、そして少しも強くなくても勝つための僅かな機会と共に現在では全てに危険を負っていた人々にとって、それは大変容易に理解することです。しかし、私はこの吃りの人を一度も困らせることが出来ませんでした。彼は確かに話をする器官に対して多くの困難を持っていました。そして

更に彼は、同じことを激しく繰返し言っていた様に、ハンマーで打つが如くに相手の人々を説得しました。彼はそれ故に思想を支配しているのかも知れません。耳が聞こえない人も同じ種類の力を持っています。吃りや耳が聞こえない人々によって管理された国民を考えるのは私の気に入りましたし、逆説的なもう一つの喜びを齎します。私は諷刺的なこの動きに従って『壺王』という表題の作品を書きましたが、未完成の儘です。私は当時そこに幾つかの章をつけ加えました。私には正確な観念に基づいた根拠があつて、莫大なこの種の冗談に驚くべき才能があります。不幸なことに文学者の特性の中で私に欠けるものが一つありますが、それは野心です。私は容易に満足して私の仕事を行いますし、仕事で熟考した数々のことを書きます。私の最高の独創性がそれらを助けます。そして私は、野心を望まなかった文学者であると自ら思っています。（完）

（1）ジョレス（一八五九～一九一四）は、政治家・社会主義者で統一社会党の指導者として反戦平和主義を説き、狂信者に暗殺された。「ユマニテ」紙の創刊者でもあった。

冬が過ぎました。それと同時に砲弾が大変良く落下した穴に、私たちが間もなく長くは止まらないとの噂が広がりました。或る夜、私がブランデーを飲んで美学談義をするために大尉の家に着いた時、大型トランクが荷造りされているのを見ました。それから私に、古文書が入った貴重な小箱と一緒に行く命令がありました。そして真夜中に電話局員たちの馬車で出発しなければなりませんでした。私は一時間程電話局の避難所で待ちましたが、そこで昔の知合いたちや、若い元気そうな顔付きの何人かの新しい知合いも発見しました。出発は全く自然に喜劇の一シーンの様相を呈していました。雲の中の月を想像して下さい。半分程明るくて道はでこぼこで、一台の馬車の中は集合した人間で一杯です。定められていた時刻丁度に出発しようとしていました。その時に残忍そうなパリ人の下士官が、黒い鞭を持ってメルクリウス⁽¹⁾の台詞を言いましたが、それは死者たちを導き、そして威厳に満ちた声で呼ぶ者の声でした。「家族よ!」。直ぐに何人かの電話交換手たちは手にヘルメットを持って子供の様にして前に出ます。メルクリウスは続けて言います、「P.C.D.F. (前線の哀れで愚かな者たち) 団体のメンバー諸君!」。私たちはヘルメットを脱いで全員が進みました。しかし、やっと私たちが儀式に従って覆われていたのは揺れた馬車そのものです。家族よ、そうではないのです。揺れに揺れて私たちは行きますが、三百メートル行った後で、穴の中で停止させられました。最悪なのは、敵の砲兵隊が目覚めたことです。激しい言葉がありました。でも、私は決して係わりませんでした。私の仕事はトランクの上で徹夜することでした。もう一人の伍長は馬を繋ぐ様に命令しました。しかしながら私は大変自然に間違いに気付きました。私たちは二対の馬を持っていました。馬たちは前もって命令で出発していたのです。泥土で馬たちの顔付きが既に臆病になっていた時(私たちの裡も臆病と言われていた様に)、馬たちの顔付きも緊張していたのです。従ってその努力は裂けて破れました。全員の顔立ちも緊張して出発しなければなりませんでした。そして私は、これが軍隊の決まりであると良く思います。これらの技術的手引きは全てが完全に行われます。面白いのは、補給のための夜間はそれらの規定が忘れられることです。馬へ、そら右だ!そら左だ!と言うのが聞こえます。私が適当な概略を示して言っているのかどうか、あるいはその概略が何か他のものに達するのか私には分かりません。私たちはそこを出発しました。不気味な村から何も無い避難所の土手まで降りました。何も落下して来ませんでした。次にゆっくりと歩きましたが、長い休止もありました。砲手たちは砲架を平原用のものにするために、攻囲戦用のものを変えなければなりませんでした。それは巻揚機やロープを使って行う大変な作業です。決まった時刻に選定した地点に全てが集結されたやり方に、私は一度ならず驚嘆しました。軍隊の管理は如何なる間違いも決して許されません。何も忘れないことを学ぶのもそこです。取分け私は新しい仕事をする時には、私自身が失敗して顔を赤くする時が何度もありました。

その日の朝に、私たちは凍った泥で起伏の多いヴィニエヴィルの右側で、良く整えられた地点に落ち着きました。数々の避難所は通過しましたが、危険で大きくなかったのです。時折り一発の砲弾しか私たちの処へ来ませんでした。私がそこで過ごした一ヶ月間は

、十二月と一月の間でしたが、負傷者が一人出ただけでした。その代わりに私たちは、酷い目に遭って泣かされた数々の砲弾を知る様になりました。新型でした。私は大尉と共に色々な破片や照明弾を見分け様としました。アンモニアの臭いを嗅ぎました。成果は遅くなりましたが、驚くべきものでした。私たちは一昼夜の間、アンモニアで涙を流していました。

大尉は、配属を変えないでも砲兵隊の命令を中尉に任せていて、私たちが分隊の長になっていた意味においては昇進していました。少し後になるとその命令は、作戦区の長官のものとなりました。私は大尉の秘書でした。そして管理することを覚えました。砲弾と荷物の勘定を調べる如く、私には直ぐにそれらのおかしな困難を乗り越えるだろうと思えました。しかし、三日間での報告や六日間での報告を行うという小さな困難は沢山ありましたし、数字は毎週変わっていました。結局のところ十分に注意していても私は二、三回騙されましたし、大変恥を掻かされました。命令の命令には眼に見えない力があり、最小の誤りにも強力な指摘がありました。でも、T大尉は何も言いませんでした。しかしこの沈黙は雄弁でした。現実には私には正確に、如何なる下士官であってもその動きと同じ力がありました。何事においても見習い期間がなければなりません。一週間後に私は出来上がりました。しかし私は、容易な仕事が幾つあっても狂気の沙汰であるこの観念を既に余りに守りましたし、同様に狂気の沙汰の観念により直ぐに修正されましたが、困難な仕事も又幾つもありました。最初は全てが困難ですが、慣れることで全てが容易になります。そして、それは純粋数学の真実であり、食糧の補給の様に必然的なものです。知性とは、これらの様々な仕事を越えた働きでしかありません。それは殆ど慣れることを助けません。屢々仕事を困惑させるものでもあります。私はそれに関係した人物の後を走った或る朝のことを思い出しますが、彼は重要な部品を欠いていた背嚢を背負っていました。それなのに私は離れることが出来ませんでした。砲手たちは私を嘲笑しました。彼らはまさに正しかったのです。無駄な動きが滑稽なのです。最終的に彼らは、私と一緒にいるのを大変自慢する様になりました。

告げ口をする人の様に、私は軍人の下っ端として大変自然に不信を抱かれるのですが、注目すべきことに私のお気に入りの地位に伴って、私には常に信頼があったことです。私が訊くことが出来たことを相手が繰返して言うのは、まさに何も私に不信が無いと思われているからです。この美德は私には当然のことです。従って私は自分の席があった避難所において、電話交換手や上等兵たちと仲良く生活しました。私は彼らにチェスのゲームを教えましたし、敷線に関しては些細な問題でも解決するために彼らと一緒に働きました。何故なら、見知らぬ型の電話機や台やベルの装置が来たからです。私はその時、一人か二人の工員を観察しましたが、彼らは大変に高度な知性の観念を持っていたことを私は知りました。彼らの中の一人がチェスの駒の動かし方を覚えた時、それから後は何時も自分が勝つのを自信を持って確信していました。新型の装置と向かい合っても同じで、忍耐強く探している私を見ながらも、私の両手はそれを掴んでいました。そして、「これは全く簡単だ」と言いながらやってみて成し遂げるばかりで、他のことも話すのでした。そして実際にチェスで遊ぶ時も難しいことは何もありませんし、如何なる術策においてもそうなのです。しかし最初は部分部分によって知らなければならず、何も忘れてはならないのです。せっかちなことが唯一の欠点です。しかし誰もそんなことを思っていない。（完）

(1) メルクリウスは、ローマ神話の商売の神で、ギリシア神話のヘルメスに当たる。天文学では水星のこと。

雪が降って一メートル近く積もりましたが、乾いた砂の様でした。如何なる火もありませんでしたが、私たちは穴の中で暖を取り、非常に小さな空間に六人居りました。一人は横になって食べていました。一種のトンネルの中に体を突っ込み、そして一台のテーブルに何人も肘をついていたのは本当です。外に出る時は、私たちには皮で出来た柔らかい靴と木底靴がありました。柔らかい靴は幸いなことに馬小屋の仕事をするために定期的に用意されます。それらの靴は固くなった雪の上ではベルの様に鳴りましたし、私たちの塹壕を造っていた氷の斜面では滑りました。この大雪は、軍事命令としては幾つかの注目すべき機会でもありました。我々の砲台は埋められていました。開けて外へ出すには幾らかの用心によって人間が姿を現すことになりませんが、完全に眼に見えないと見做すことも可能でした。しかし、一発目の発砲は数多くの黒い足跡を残しましたので、私たちを容易に発見させることになりました。つまり雪を運ばなければなりませんでしたが、私たちは飛行機から撮った数枚の写真で発見されました。どんなに小さく踏みつけた処でも、仕事をした場所を大変明瞭に示していたのです。しかしながら私たちは偶発的な砲弾しか受けませんでした。それに反して、私たちはアエツト峡谷周辺に我々の砲撃の後を残すことが出来ましたが、そこは我々の障害物の目標でしたし、まさしく標的の様なものでした。そして、それらの砲撃は規則正しく分配されていました。ヴェルダンの大障害物からは一度ならず耳にがんがん響きました。私たちは一分間に二発の砲撃で勝負を付けましたが、我々の大砲にとってはそれが最速でしたし、蛙が跳んで退却する様でした。その上に、全ての大砲にはリズムがありましたが、早かったりそうでなかったりしました。ピストンのブレーキは慎重に抑制された発明の一つで、有効性が無いことを私は既に言いましたが、煙の出ない火薬も同じです。この抑制は非常に大きな大砲にしか役立てることが出来ません。少し発砲するだけで移動するのは難儀です。私は腕時計で発砲の速度を確かめました。それも私の任務の一部でした。もう一つの任務は夜の発砲を命じることでした。これは驚くべき発砲で、複数の大砲が同一地点を砲撃で粉々にすることでした。先ず第一に電話で腕時計を合わせなければならず、その次に定刻を待ちながら徹夜になるかも知れませんでした。定刻に近づくにつれて仕事が難しくなりました。ランタンを持って幾つもの班を起床しに、二つの砲兵中隊を走り回らなければなりませんでしたが。氷河のこの地形は穴や瘤を作っていて、ランタンの明かりの輪では限界があり、実際に間違えることもありました。時折私は地面すれすれの処で大砲の口を見ましたが、多くのことが分かりました。戻らなければなりませんでしたが。私は最後に温かいトーチカを幾つも発見して、眠っている人々を揺すりました。全員が二つの砲兵中隊に沿って移動している間、私は占領していた地点に身を置いて、二度目の砲撃の時を待ちました。その時、大砲から八発の砲撃が行われて、私は喜びました。それは八本の細長い火の跡を残していて、大変な喧騒でした。他の砲兵中隊も、速くても近くても同時に発砲しました。私は陶醉しました。もしもそれと同時に目標に着弾したのを見たならば、この大砲の追撃は最も大きな喜びの一つになるでしょう。「殺人を考える観点は無いでしょう」。しかし誰がそれを思考するのでしょうか。私は、何発もの時限弾があちらこちらで必ず

爆発しても、そのことを考えることさえありませんでした。その間に避難所まで滑り易くなった足で戻りました。人間が一つの力を行使している時には怖い筈がありません。動きの一つが他の動きを排除するのです。

それは私にもう一つの間狩りを思い出させます。そこでの私は人殺しの意志がありましたし、更にその上で明らかなことがありました。それはポーモンの立派な監視者に従事することでしたし、そこでは大変に大きな景観が見えました。ところで、ガルガンチュアという名の森の近くには有名な砲兵中隊がおりましたが、草原に沿ったり小さな茂みの近くを毎日呑気に通る食事の運搬人を私は見ました。私たちには小さな茂みに向けられた一門の大砲がありました。問題なのは、砲弾の飛行が考慮された丁度良い時に正確な発砲を命令することであり、その飛行は少なくとも十秒間かかるものでした。この砲弾は一度も人間に触れたことはありませんでした。しかし、その働きは情熱を掻き立てました。砲弾の通る音が聞こえました。そして次には全員が沈黙して、静かにその茂みに近づきました。それから数秒後に立ち止まって恐らく耳を傾けて見ました。そして砲弾が近隣で爆発していた間に、近くの溝に向かって走るのが見えました。唯一の成果は、彼らがもっと先まで溝を掘っていたことでした。その茂みを発砲した大砲は九十ミリ砲で、思い出しても優れていた旧式の型でした。これらの大砲は大変正確に発砲したのです。このデサルー砲弾の直径は、後方がやや細く作られていました。この形の変化は射程距離を千メートル以上長くしました。その時に哨戒中の大砲としては、輸送車の列が通過するのが見えると道路を妨げることが出来ました。一発の砲弾で十分でしたし、私たちはそのことを良く知っていました。それらの働きには如何なる悪意も無いことを私は知って欲しいと思います。狩猟の様な熱心さで全て行われていたのです。

ヴィニエヴィルでは私は獲物を見ませんでした。しかし専門の活動は既に十分専念していて、私は長期の休暇を残した儘にしていましたし、この戦争の任務に少しも退屈していませんでした。今では大尉が私と話していても、彼は大尉であったことを忘れていました。彼は時々言いました、「あなたが班の人と笑っているのを聞くが、私はあなたを羨ましいと思う。私は独りである。余り私を忘れないでくれ」。彼は私の肖像を油絵で描きました。しかし私は、彼がこの種の絵を描き上げる術を知っているとは思いませんでした。というのも、その創作は中断されたからです。砲台や雪景色の素描を、水彩画やグワッシュ画(1)に着色された彼のものを私は単に見ることが出来ただけでしたが、確かに良い出来でした。大地の瘤はそこでは怪しいものでした。そこでは待ち伏せている力の予感がしました。しかし私たち以外の人々が、これらの些細なしるしを把握していたのでしょうか。私たちはこのことやその他の多くのことについて議論しました。私はダ・ヴィンチやミケランジェロやラファエロ以後の絵葉書を郵送して貰っていました。私には大変に確かな好みがあり、私のことは確信を持って正しく言いたいのです。しかし一般に私は、そのことを少しも行使しません。芸術に興味を抱くには、退屈な思いに陥り易くならなければならないと私は思います。これらの会話は私の裡に不変の意見を目覚めさせました。そして、その点についての注意力を身につけながら、私は心密かに『芸術論集』を書き始めました。

(完)

(1) グワッシュ画は、アラビヤゴムで顔料を溶いた不透明水彩画である。

私はその時に『芸術論集』の第一章を書きましたが、それは私にとって全く新規のことです。しかし、恐らくそれに興味を覚えた読者諸氏にとってはまさに少しも新規ではありません。発見されることについてしか良く書かれていませんし、興味のある新規の口調なのです。何故なら全てが言われていたからです。しかし、退屈にさせられた作者には何が出来るのでしょうか。

勿論、絵画や建築や音楽や詩には、幾つものありふれた考えがあります。そして裕福な様なものに目覚めたり、飛ばされているのを見せられると美になるのかも知れません。率直な人は、これらの全てのもを冷笑的な能力に従わせながらもそこで役に立つことが出来ます。古い修辞学と新しいほら吹きの不条理の間には、一本の道があるのかも知れません。スタンダールを読んだり、ダ・ヴィンチやレンブラントのデッサンを研究したりして、哀れな砲手たちを忘れるしかありませんでした。私たちの話によって学生の小部屋に変えられた大尉の避難所で、私たちは平和な時代のための計画を作りました。美術館や記念建造物や画商を点検しました。実を言うと、これらの計画を行ったのは特に大尉でした。私としてはこれらの時間を全て無視した後に私の視線の高さにある、自然に出来たこれらの氷の瘤を見詰めていましたが、他の数々の瞑想が蘇って来ました。戦争とこれらの計画との多くの繋がりは避難所の中で行われ、忘れられる運命にありました。しかし大尉は望んでいたものが分かっていました。平和な時になって真っ先に私はドアの下に彼の絵葉書を発見しました。私は本当の友情の動きを乗り越えながら平然として答えました。何故でしょうか。私が詩人や画家や演説家たちでさえも養っているこの世界を除いた儘で何故居たのか、それも同様に尋ねられるかも知れません。実際に私は、戦友たちの中では最早一人しか知りません。彼は労働組合員です。第十四連隊の感じの良かった大尉のアレル神父です。私は戦友たちを少しも探しませんでしたし、その時に彼らを見付けることは私には十分に容易でした。それに反して私は、トラックの座席にのろ鹿の股肉があった人物のバラールを探した時がありました。そして長い間、石工たちの足場を熱望していましたが、そこで私は歌手のムーに会うことを希望しました。さもないと私は彼の表敬訪問を再度受けることでしょう。要するに私はやりたいことを選びました。そして、見捨ててあらゆる機会を変えたことに自ら良しとしない日は少しも無いのです。それは私が、不条理で機械的なこの戦争を許すことが出来なかったということです。それは私が、今までになく巧みにそれらの所定の場所を私に開けたということです。それと同時に大変に恐ろしいことも私は知りました。本当の処、私が垣間見たのは政治的紛争があらゆる国に同じ様にありましたし、その紛争は主人に対する奴隷の反乱以上のものではありませんでしたし、愚かな殺戮の後で待たなければならなかったことでした。〈重要なこと〉へのどんな努力も信じさせるためのものでしたし、鉱山の坑夫やこの種の仕事の様に恐らく割の悪い仕事には少なくとも最高の賃金を望んでいたことを信じるためのものでした。何にでも良識や実践という薬がありますが、それは戦争の隊形や脅威が逸らしたり延ばしたりするための知られた方法になるのを斟酌している訳ではありません。私は全く別のものを見た信じました。つまり戦争の隊形そのものに大変精力的に保たれている不平等が、その他の全ての不平等の原理でし

たし、その源泉は不公平を導いていると感じた人々です。しかし、それらの方法がそこから押し進めることには彼らに欠けていました。そして恐らく彼らは諦めて大変早く富裕者を望んだのであり、その上平和になることを願いました。ところで、あらゆる方針において上官たちは同一の原則に従っていた様に私には思えました。ジョレスの『新しい軍隊』はそれが出版された時に、私の眼には恐ろしい作品でした。しかし廃止された数多い野営地において、学問と美德が各々その立場で野蛮の限界を遠ざけていましたし、戦争の体験後には更にもっとその様に私には思われました。そして、知識ある全ての人々が命令で直ちに徴兵されても、少しも奴隷状態を選択しなかったのは明白でしたので、私が最後に見たのは私の周りの人々が実際に殆ど等しい二つの集団に分かれて、話すことに反対する人々の社会でした。その一方の集団は権力と富裕と出世に希望を持った人々で、彼らは大変雄弁な古い教義を非難します。もう一方の集団は服従に捧げられた人々で、権力を拒む大変雄弁な小さな群と一緒です。しかし。前者の人々は教義から教義にさ迷い、屢々全てを否定したり受け入れたりして危険な皮肉にまで行きます。後者の集団は未だ自分自身の教義を表現出来ませんでした。行為によるしか強くなりませんし、それは直ぐに戦いになります。

それ故に何をしなければならなかったのでしょうか。最初はありふれた考えを殺すことであり、そこから遠くに再び上がることです。というのも軍隊の秩序であった昔の秩序は形而上学的であり、宗教的でさえあります。そこでは私の仕事であるものを見分けなければなりませんでした。ところが、その結果はそこでは殆ど知覚出来ないものです。アカデミーの賛辞や偉大な地位への誘惑は、精神の批判部分を直ぐに沈黙させました。そして精神を信じることは、理性によって何も信じない様に養成される人には容易であるとさえ私は確かな観点から言います。どんな知性ある人も、あるいは殆どの知性ある人も、従って秤のもう一つの台に陥りましたし、そこには既に金色で飾られた庇の付いた帽子と命令のための剣があります。彼は、仲間を非難するために役立てません。先ずは同じ誤りから身を守らなければなりません。理性的な集団とは、意志的であるにしろ無いにしろ圧力と解放の公平な点を、大変強くて勇敢な大衆に隠している数々の教義によって曲解する儘にせず、大衆を止めて置くことにありました。困難な地位です。何故なら、割の良い猟犬の群が右側に牙を示している間に、労働組合員は左側を吠えないで済ませるからです。しかし私が仲間の組合員と共に毎年行って来た経験は、阿（おもね）ることなく納得させたり、集合しないでも参加することが出来たりするのを証明しています。私はそれ故に唯一の可能な地位で固く役割を果たしております。法に違反することなく、私は独裁者たちを罰する様にする困難な約束も又果たしています。これらの考えは、戦争が続いていた数年の間にやっとのことで明らかになったのです。

結局のところ、私が書いている年である一九三一年にG・フェレロ(1)という歴史家が、彼独自のもので歴史家たちの軍隊を動揺させるであろう方法で、その教義を解明しました。くるくる変わるこの動きは政治を大いに変えました。しかし私はそれらの予言を放って置きます。兎に角、今は少なくとも大佐である人物と共に芸術についての対談を楽しむことを私が恐らく拒まなければならなかったのは事実です。危険な関係です。私は、これからは大砲の話に戻ることにします。私はそこに長く残ってはいけなくなって来たのです。(完)

- (1) G・フェレロ(一八七1~一九四三)は、イタリアの歴史学者で、一九三〇年にファシズムに反対して、イタリアからスイスへ去った。著書は『ローマの栄光と凋落』(一九〇二~〇七)、『古代文明の破滅』(一九二一)がある。

私に関する通達が総司令部から到着しました。私が軍の気象任務へ配属されるのは、行わざるを得なかった要求として求められていたとのことでした。でも、この要求は無駄でした。他のことをやるしかなかったのです。しかし、その点について私は決して譲歩しませんでした。私は大尉に言いました、「私の任務は簡単です。足の怪我は少しずつ治っています。私はここでは必要であり、私だけはまだ必要になるだろうとあなたは私に言っていますよね。私は望んだことだけで満足していますし、私たちは一緒に残るでしょう」。しかし大尉は管理する術を知っていました。彼は言います、「あなたはこの要求のことに関しては最新の休暇までを話さなければなりません。司令部が口を出すのですから、確かに向こう側でのあなたには興味があるのです。それなのにあなたは司令部が何であるか知らないのです」。私たちは自分の仕事とその話に戻りました。雪は積もった儘でした。戦いは、うとうとして進展せずにまどろんでいました。私は准尉と同じ様にこの生活に適応していました。人間関係の秩序、軍隊の流儀、暗号、そして最後には軍隊の事務仕事の部分を全て知りました。私は絵葉書の上等なコレクションを持っていましたし、私の肖像写真は殆ど眼鏡を掛けて写っていました。従って大尉が良く用意した任務の通達が届きました。「C上等兵(1)は直ちにデュニー(セーヌ県)へ向かうこと。この命令の実行に関しては報告すること」。大尉は言いました、「命令は以上です。あなたが出発したならば、私が報告します。今から三日間で、あなたは後任者を養成する様をお願いします。その後で一頭立て二輪馬車でニクゼウイルまで行って下さい。到着は急がなくて良いです。一週間で行って下さい」。この三日間は大変に快適でした。それから私は名残惜しい思いをしなければなりませんでした。しかし、例え何かが考えられるとしても、嬉しい思いで戦場から離れます。それは馬たちが補給のために戻って来た時に見られるものと同じです。でも、動物たちは別ですし、歩き方も音も別ものです。結局のところ私は、雪の中を朝早く出発しました。そしてジャンナンは、あの何時もの言い方で私の荷物を持ちながら言いました、「あなたの居場所はここではなかったのだ」。何故五十歳の男は参戦しないのか、私は良く知りたいと思います。トゥールの国土防衛兵たちの中には、彼らの世代とは別の六十歳以上の人も多くいる様ですし、あらゆる種類の疲労に耐えていました。任務を少し和らげることは容易ですし、激しい死の危険が生じるのも別であると私はつけ加えて言います。多分、高齢者たちは嫌われているのです。取分け教養ある人はどんな人でも将校にならなければならないという一種の原則は嫌われます。ところが、教養ある人が将校になることを拒絶するとなると、その反対であると私は思います。それを強制出来る法は何もありません。何故なら特別試験を何時でも拒絶することが出来るからです。公正で人間的な上官でいたい気持ちは、学識ある人には自然なものです。しかし権力は、権力を行使する人を非常に変えることを知らなければなりません。それは少なくとも社会的な伝播に繋がりません。その理由は命令の必然性にあり不屈のものであるからです。一代議士が大臣になることには用心しなければならぬことであり、一労働者が使用者会議への代表者とか労働組合の代表者になることにも用心しなければならぬことであるのは、同じ理由のためです。拒絶のための制度を導く

処が要求されます。それは恐るべき制度を第一に否定することです。そして聖人たちは司教や小修道院の院長や神父になることを拒否することによって、昔の不平等に大いに反対したのだと私は思います。神であってもそうでなくとも、救いであってもそうでなくとも、聖人たちは権力者たちの罨を見分けました。彼らは勲章を持っている高位聖職者たちに無言の非難を浴びせていました。宗教は社会の中の人間たちを、永遠の場所に生き生きとしたイメージとして翻訳するだけでしたし、全ては哀れな人々が直ぐに自分たちの友人や忠告者たちを失う様に決められているのです。今日では給費生たちが出身地の人々を速やかに捨てます。この裏切りは偉大な言葉に染まります。国を愛することとは、常に統治する世論に従って栄光と富裕と権力を愛することになっているのです。この美德は少しばかり容易すぎます。長としての仕事を選択することは満足感のための一つの選択なのです。そして全ての危険は等しく、将校は一兵卒よりも幸いです。更に将校には権力があり、酔わせる物もあります。その上、危険は天候だけです。私は、野心を忠誠心に変装させている者たち全てを敢えて笑います。「しかしもう一度、私たちは何処へ行くのでしょうか。あなたが行う理性的な働きは、高潔な精神に基づいて行動するのが本来のものです。何ですって。私たちは最早冷淡な野心家たちしか大臣と見做さないでしようが、私たちの将校たちは無知で粗野でしようか」と理性的な人は尋ねます。そのことにあなたはあなた自身で知る以上には政治の未来を最早知らないのであると私は答えます。私が良く知っていることはあなたが私に話す、頭を下にした状態は可能でなく、権力の制度はその時に激しく変わるということです。私が、表された世論と言っている世論は阿ることに抵抗します。これらの効果はゆっくりとしていて眼に見えず巨大なものです。そして、これはローマ教皇や司教たちの古い権力になるのでしょうか、非常に早く腐敗し、その度に実際に一種の絶対に過たないものに基盤が置かれます。もしもあらゆるギリシア語学者たちがブラック(2)の様に考えたなら、そしてあらゆる物理学者たちがアインシュタインとかランジュヴァンの様であったなら、考えた以上に偉大な革命家になるでしょう。そして多くの人々に沿った自分自身の正しい誓いに変わりありません。しかし優れた精神がありふれた考えの政治家たちに賛成するなら、どんな革命も意味が無くなるでしょう。(完)

(1) アランの本名は、Émile-Auguste CHARTIER (エミール=オーギュスト・シャルティエ)である。

(2) ウィルヘルム・ブラック(一八四二~八〇)は、ドイツの政治家で社会民主主義労働者党の創立者の一人である。

私はヴィニエヴィルで長い期間を過ごしました。そこでは既に無線電信の職人になっていたCに再会しました。私たちはまさにそれらのことを話しましたが、私も同様に無線電信に従事していました。私たちは数々の困難にぶつかって来ました。彼はそこでは目を眩ませる埃から抜け出ていました。しかし三十歳の頑固者は物分かりの良さは少しも望んでいません。私たちは信頼する誓いを繰返しました。そして最後に私は、不気味な鉄道や酷く貧しい下層民で一杯のガラス窓の無い貨車まで、雪景色の中を車で彷徨いました。その夜に私は肩にリュックサックを背負って、バル＝ル＝ドックの舗道に滑り込んで、駅の監視員室まで這入り込もうと努めました。そこで私が自己紹介しなければならなかったのは、通行禁止場所を全て見付けるためでした。以上は兵隊の運命です。私は敵の障害物になることを強制されていましたが、伍長は私の方を少しも見ないで、私の旅行許可証に日付と概要を記しました。私の戦争は終わりました。最早今では、私は兵舎での話しか話すべきではありません。私は広大な飛行場に降りました。そこでは全員が防衛していましたが、許可無しで出掛けるには少なくとも方法が七つあることを私は学びました。閉まりが悪い大きなバラックの中は、私には戦場よりも寒かったです。しかし私は色々なことを学びましたが、話したいのは取分け次のことです。教育するための技術は軍人たちの家にしかないのです。何故でしょうか。何故ならば、理解する前に先ず学ばなければならないからです。そして、ここでは処罰が大変に厳しいものでした。全ての歩兵たちは手当たり次第に何でも学んだので、最早砲弾の音も聞こえません。ところで私たちが学んだのは天気予報でしたが、それは色々な予想が当てにならないのと同じ様に解釈が厳しい学問でした。この学問は、先ず写しを取らなければならない五冊か六冊の手帳に全てが要約されていました。写しを取ることは大変に正しいです。それは熟考する方法としては一番に良いことです。その次に気圧計や温度計やその他の全ての観測を行わなければなりませんでしたが、何度も行わなければなりませんでした。そのことも同じく正しいことです。というのも人は知る以上に信じるのが早過ぎるからです。地図上の等圧線の曲線を引かなければなりませんでした。結局私は重くて太いペンのお陰で、電話で伝えることしか正しく判断されませんでした。しかし私の知識は無駄ではなかったのです。何故なら夜の監視においても全てをやらなければならない、更に数字であったからです。

私たちは、天気予報官の仕事を熱心に行うことで殆ど全ての軍人の退屈から免れていました。しかしその偉大な率直さに、ついに犠牲者が出ました。軍艦の大尉が私たち全員の上官でした。そしてその人は真の軍人でした。或る日、彼は正午に会議を行う命令を将校と飛行士たちに正午の十五分前に出しましたが、私は気圧や風向きと同じで何も知りません。私たちの中尉はそのことに関しては大変良く知っていて、数々の危惧があるそれらを意を決して強硬に披露しましたので、会議は行われませんでした。惨憺たる戦いになって仕舞いました。二時に中尉はランスへ送られることになりました。そして慌ただしく別れを私たちに告げました。私は絶対権力をそれなりに知りました。私は部下から上官への話を偶然に聞いた時には、この種のことが良く行われるのを予想をしました。この単純な転任は既婚者で毎晩自分の家で寝ていた者にとっては一種の

不幸でした。ルイ十四世が支配していた様なやり方です。私たちも、意地悪な学者ぶった二人目の中尉の配下に置かれたのですから、同様に犠牲者でした。声が意地悪なのです。何故なら殆ど仕事に興味を示さなかったからです。そして彼は無礼であるだけ無知でしたので、私たちは彼を容易に罰していました。しかし私が言った様に、これは兵舎のお話です。時折、私は皮のベルトを締めて野菜屑を管理していた台所へ行きました。キャベツの芯が幾つもある中で、私は彫刻についての章を書いたのを思い出します。

私は軍隊生活と共にそれも終わりましたが、天気予報について気付いた点を幾つかこの物語に少なくともつけ加えたいと思います。一つ目は、細かいことですが大変に奇妙なことです。それはパリでは南風が決して吹かないことです。風が南西部から北や東や南東へ吹く時、何時も北西側を通るのです。このことを私が言うと人々は信じ難いと思いますが、そうでなかったことは少しもあり得なかったのです。そして、その特異性は、風向きが北から南西と南東の間を揺れることしか起きないので、記録する器具の構築にとっては重要なことが多くあるのです。天候の予測に関して私はもう一つ観察しました。それは翌日の予測よりも二週間先を予測することの方が容易であることです。地域的例外又は一次的例外に止まることがなければ最初の場合、気圧と風向きによって一般的な規則が予測されます。そして私が理解した様に屢々専門家も良く予想します。日々の連続が専門家に理性を与えます。ところが翌日の予想は単純な農民にも出来る予想と殆ど同じ成行きなのです。人は良く思考するので、総司令部は翌日とその夜の予想すら望みました。一人ひとりに大変強い服従の精神は、沢山の躊躇の後に霧と雨と晴れ間を混ぜながらも慎重に全ての危険を必ず告げていましたが、それは誰にも教えませんでした。それに反して私は確かな俄雨が如何なるものかを知りましたが、それは鉄道列車の運行と殆ど同じ様に明らかなもので、一時間先の予報を告げられるかも知れません。従って滑走路に沿った飛行場に俄雨を予想した後で、私たち自身がそこにいた時、私は静かな大空の下で腕時計を見たり、草の葉がそよぎ始めるのを窺ったりすることが出来ました。この種の予言が生じたのは取分けシャルトルからです。そこでは観測者が埃や麦藁の切れ端から小さな熱帯性低気圧の様相の下に俄雨になるのを見ていました。結局のところその様にして私が学んだのは、殆ど雷雨になる絶対に間違えないしるしが気圧による一律性を生んでいることであり、それは私が時々理解しようとして試みていたことなのです。しかし、一九一七年一〇月に戦場から市民生活に戻ると、私は一日に二回受け取っていたメッセージが無くなりました。それらは私たちが天気予報を考察する材料として役立っていました。私はそこから農民風な方法に戻りました。しかし少なくとも私は観察することや、修正することや、道具を操作することを訓練させられましたし、それは軍隊式のやり方でした。つまり非常に厳密でした。もしも私が偶然にも完全に軍職にいた銀行員であったなら、財政の未来を聡明に予測するのに何の失敗もしないでしょう。聡明にということは、正確にと言いたくないからです。これは天気予報から私が教わったことです。いずれにしても私は財政や政治に対しては、雨に対するのと同じ様に、農民風のやり方に還元させられました。それは少なくとも大きくて明白なしるしに従って行動するもので、修正は小さいものです。政治に関しては労働者の方法を望み得ることによって、予想すると同時に支えるものになります。それは純真な市民の幾つもの方法を十分に決定しますが、市民は偉大ではありません。しかし又、無価値で下らなくもないの

です。

一九三一年記す

私は、この一九三三年五月に、これらの頁を全て読み直しました。幾つかの調整は行うことになるでしょうが、これらの生彩ある意見を変える処は何処にもありません。それは或る人々には必ず気に入るものかもしれませんが、他の人々には気に入らないものかも知れません。命令するというやり方には数々の危険がありますし、服従するというやり方にも又、数々の危険があります。或る人々には数々の集団によって私が書いたものに倣って、それを熟考することに向けられるでしょうが、それは全て私が期待していることです。しかも、要するに私はそのことに強固な希望を持っているのです。（了）

この翻訳は、フランスの哲学者アラン（一八六八～一九五一）が一九三七年五月にアルトマン社から刊行した『大戦の思い出』Alain, SOUVENIRS DE GUERREの全訳である。テキストとしては、Alain, Les Passions et la Sagesse (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1960 に所収されているものを使用している。

アランは『大戦の思い出』について、一九三八年一月に書かれた「マリー・モール＝ランブラン夫人への献辞」の中で次のとおりに記している。「この作品は、私の作品の中で最高の打明け話となっている。伍長が語るものであるが、伍長とはこの私のことである」。

アランの打明け話には既に『わが思索のあと』（一九三六年六月刊行）があったが、その翌年に『大戦の思い出』が刊行されたのである。前者はアラン自身の思想に関する自伝的作品であり、後者は第一次大戦中の一兵卒としての自分史と言っても良い。戦争の中で生活して恐怖というものの本質を炙り出している。もっと正確に言えば、恐怖を克服して戦場で戦ったのではなく、戦うために行動することが自然と恐怖を克服出来たことをアランは告白している。戦争という実体験を通して自由であることについて考察した本書は、自らの私生活については殆ど書かなかったアランにとって稀有な作品である。アランの伝記を書く機会に恵まれた人がいるとするなら、戦時中の出来事に触れない訳にはいかないであろう。又、その後のアランの生き方にも大きな影響を与えていると思われるが、この点について今は触れないで置きたい。何故ならアランの思想という大洋を航海するには、まだまだ我が国の受容は十分でないと思われるからである。

なお、マリー・モール＝ランブラン夫人はリセにて理科を教えていた教師であり、アランが一九〇〇年のルアン時代に民衆大学で知り合い、その後一九〇三年のパリ時代に再会して四〇年間近い一九四一年に夫人が亡くなるまで生活を共にして来た女性である。第一次大戦に参戦したアランは戦場で書いたものを毎日のように自宅へ郵送し、その都度夫人は原稿を纏める秘書のような仕事をしていたと言われている。謂わば夫人はアランの文章を最初に読んだ人間であり良き理解者でもあった。

書き手は孤独であるが、アランにもやはり読者の存在が必要であったと思われる。但し、多数の読者を念頭に置く必要はなく、恐らく一人で良かったのであろう。何故ならアランは書いたものが直ちに巷間に流布されることには殆ど関心が無く、その視線は寧ろやがて読まれるであろう将来の多くの読者の方へ向いていたのであり、そのことを確信していたからである。思想とか熟考は時間が長くかかるものであるから、それらが生活や社会において直ちに実を結ぶことは決してないことをアランは熟知していたのである。

私はこの翻訳を、パプーの電子書籍の同人誌「風狂」第三五号（二〇一七年六月登録）に一回目を掲載して毎月翻訳して来たが、第六〇号（二〇一九年七月登録）をもって完訳することが出来た。私もアランに倣って先ずは一人の読者のために翻訳したつもりである。しかし、もしもこの翻訳が将来も多くの人々に読まれないならば、それは全て翻訳者の責任であると思っている。

二〇一九年六月吉日

東京西郊「たまプラーザ」の寓居にて

翻訳者記す

アラン
大戦の思い出（下）

<http://p.booklog.jp/book/128327>

翻訳者：高村昌憲

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128327>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社